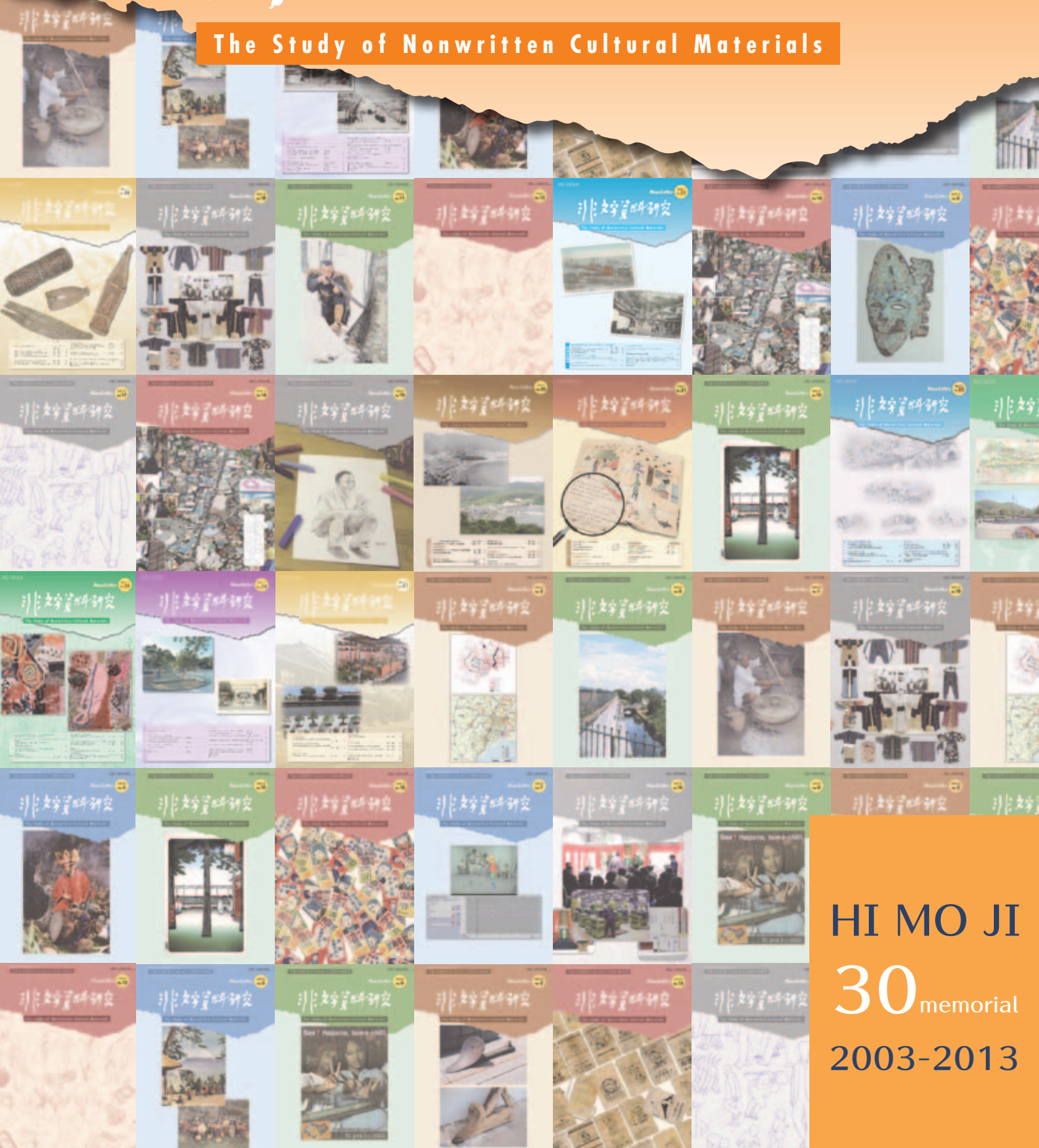


非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



HI MO JI

30_{memorial}

2003-2013

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter 2013.7 No.30 CONTENTS

ニューズレター「非文字資料研究」30号刊行にあたり・3
田上 繁

2012年度神奈川大学非文字資料研究センター 第1回公開展示

「稲宮康人写真展 帝国後 海外神社跡地の景観変容」
…………… 4

2012年度神奈川大学非文字資料研究センター 第2回公開研究会

「帝国後 海外神社跡地の景観変容
—台湾の事例を中心に—」…………… 6

2012年度神奈川大学 人文学会・非文字資料研究 センター共催講演会

「カメラが開く記憶の扉
—中国ドキュメンタリー映画の試み—」…………… 12

研究会報告

漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際学会議
「グローバル時代と東アジアの文化表象Ⅰ」の報告… 14
内田 青蔵

研究調査報告

『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究
フランス都市風景の歴史的変遷を探る …………… 16
熊谷 謙介
『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究
琉球を五感で調べる …………… 18
富澤 達三

招聘研究員レポート

幸福な交流の日々 …………… 20
黄 清喜
清末民初における中国演劇の西洋への波及と
日本との関係 …………… 22
李 惠
近代建築の文化的脈絡を探して …………… 23
霍 九 倉
近世日本の尼寺：「駆け込み寺」東慶寺と「比丘尼御所
(びくにごしょ)」制度…………… 24
Nicolette Lee
念願の日本コロムビア訪問 …………… 25
Caroline Boissier

秀吉のお城を巡って…………… 26
鄭 潔 西
「日本を観る」から「日本を感じる」へ…………… 27
韓 男洙
日本で陶芸を学んでいる、または陶芸に従事している
外国人 …………… 28
Liliana Granja Pereira de Moraes

派遣研究員レポート

北京の“非物質文化遺産”—“毛猴”(hairy monkey)・30
于 飛
カナダ日系人の移民史—第二次世界大戦まで…………… 31
姚 琼
日欧における住宅用台所の近代化過程に関する研究
…………… 32
須崎 文代
出稼ぎ「農民工」の生活現状及び都市における民俗事象
に対する受容—広州市、東莞市における「農民工」を
事例に— …………… 33
王 新 艶
サンパウロにおける韓人達の食文化研究 …………… 35
李 徳雨

■海外提携機関との招聘・派遣事業について …… 36
■ブックレット紹介 …………… 37

コラム

二つの都市で開かれた二つの展示会 …………… 38
韓 東洙

研究エッセイ

コラージュを通して見えてくる現代美術の展望と野望
…………… 40
小松原 由理
ウィスキーと文化…………… 42
ステファン・ブッヘンベルゲル

■渡辺美季先生が伊波普猷賞を受賞…………… 43

書評

鳥越輝昭著 『表象のヴェネツィア—詩と美と悪魔』・44
藤田 侑一郎
吉川良和著 『北京における近代伝統演劇の曙光—非文
字文化に魂を燃やした人々—』…………… 45
山口 建治

■「非文字資料研究」バックナンバー総目次
No.20～No.29 …………… 46
■国際常民文化研究機構刊行物 …………… 48
■2013年度センター研究員・研究協力者…………… 49
■2013年度個人研究課題一覧・
2013年度奨励研究者決定…………… 50
■主な研究活動 …………… 51
■Information …………… 52

ご挨拶

ニューズレター「非文字資料研究」 30号刊行にあたり

非文字資料研究センター センター長 田上 繁



非文字資料研究センターのニューズレター「非文字資料研究」第30号をお届けいたします。節目の30号（本センターでは20号から）を刊行するにあたり、これまでご理解、ご支援をいただきました学内外の多くの皆様に改めてお礼を申し上げます。

ご承知のように、非文字資料研究センターは、2003年の文部科学省による21世紀COEプログラムに採択された「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の後継組織として2008年に発足いたしました。このCOEプログラムは、文字に表せない人間の営為を資料化して分析する「非文字資料」研究の確立と、グローバルに活躍する若手研究者の育成という二つの大きな目標を立てて推進されました。そのため、研究対象とした図像、身体技法、環境・景観の三分野の研究を担う研究者の組織化、海外提携機関との若手研究者の派遣・招聘制度、PD・RA制度、奨励研究制度の導入などといった斬新な内容がプログラムに盛り込まれていました。

非文字資料研究センターでは、そのプログラムの内容を受け継ぎ、すでに第一期（2008～2010）の共同研究プロジェクトを終え、現在は第二期（2011～2013）の最終年度にあたり、研究成果の取りまとめの段階に入っています。5班7課題の共同研究プロジェクトが進行中であり、課題の中には『『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂』『東アジアの租界とメディア空間』『水辺の生活環境史』など特徴ある研究も含まれています。世界的にも“HIMOJI”の名称も認知度を増し、新たな領域を開拓する「非文字資料」研究として確実に発展を遂げています。

一方、若手研究者の育成については、若手研究者の派遣・招聘制度では北京師範大学、フランス国立高等研究院、ハイデルベルク大学など、中国、韓国、フランス、ドイツ、ブラジル、カナダの9研究機関と提携を結び、相互に年間一人ずつの若手研究者の派遣を行っています。若手研究者の中には、派遣・招聘の研究成果を「ニューズレター」や「年報」に掲載するとともに、博士論文にも反映させて学位を取得した者もいます。この派遣制度に関しては、期間の延長とともに、従来の歴史民俗資料学研究科と外国語学研究科中国言語文化専攻に加え、2012年度からは法学・経済学・工学研究科および外国語学研究科欧米言語文化専攻もその対象とし、「非文字資料」研究を目指す多くの若手研究者が海外で研究できる条件を整えました。また、研究費の支援を目的とする「奨励研究」でも新たに二つの研究科を加え、「非文字資料」研究者の育成と研究の向上を図っています。これらの制度の採択者のなかから、学位取得者や海外の研究職に就く研究者も現れるなど、若手研究者育成のプログラムは機能していると思われます。本センターの役割は、将来にわたってこのプログラムを完成させるところにあり、研究者だけで構成される研究所とは若干性格を異にしているといえます。

今後は、若手研究者の交流だけにとどまらず、研究者相互による共同研究の実施や国際シンポジウムなどの開催を通して研究者同士の学術交流を一層促進していく必要があります。今年3月に台湾の国立中央研究所と国立図書館を訪問する機会を得ましたが、膨大な「非文字資料」の収集やデータベース化の進展度と、「非文字資料」研究の可能性の大きさには目を見張るものがありました。「ニューズレター」の誌面をさらに充実させるためにも、「非文字資料」研究の先駆者としてこうした海外との協力関係を強めながら、研究の深化と若手研究者の育成に尽力していく所存です。

2012 年度 神奈川大学非文字資料研究センター 第 1 回公開展示

稲宮康人写真展 帝国後 海外神社跡地の景観変容

期 間：2012 年 12 月 11 日（火）～ 20 日（木）10:00～16:30

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 16 号館 2 階 ホワイエ



写真展示の概要について

稲宮康人（写真家）

2012 年 12 月 11 日から 20 日まで神奈川大学にて「帝国後 海外神社跡地の景観変容」の写真展示を行った。展示したのは、明治以降に大日本帝国領内に建てられた

神社が現在どのようなになっているかを撮った写真である。海外（台湾、朝鮮、樺太、南洋、満洲の各地域に創られた神社跡）を中心にして、国内の創建神社（樫原神宮、平安神社、靖国神社）を織り交ぜ、戦前の神社機構の概要を視覚的に提示することを試みた。

今回の展示は 3 つの展示方法を用いて全体を構成した。

- ①旧帝国を構成していた前掲各地域の中から代表的な写真を選び地域に関係なく並べ、当時の神社の広がりについて提示。（展示風景①参照）
- ② 2011 年に行った「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」研究班主催の台湾神社跡地調査の際に撮った写真を展示し、特定の地域の中で神社跡地がどのように変化したかを提示。
- ③比較的遺構が残っている 3 箇所の神社跡地（江原神社・韓国、樺太護国神社・ロシア、嘉義神社・台湾）について、それぞれ複数枚の写真を展示し、広大な神社跡地の全体像を提示。（展示風景②画面右参照）

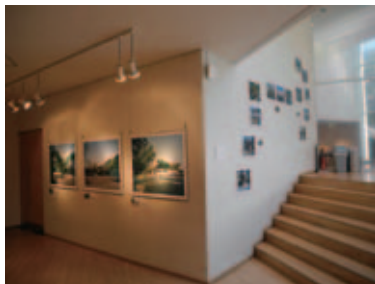
また、それぞれの場所に対応する当時の



建国神廟跡（現 偽満皇宮博物館）長春・中国



展示風景①



展示風景②

絵葉書・古写真をあわせて展示し、過去と現在の移り変わりがわかるようにした。

撮影にあたって見えてきた各地域の傾向を記しておきたい。今回の展示で一番多くの写真を展示した台湾には比較的神社遺構が多く残っている。ただし、親日国だからと云うような単純な理由ではない。国共内戦に敗れ逃げてきた国民党政府が神社を忠烈祠として使用し、その結果、遺構が多く残った。韓国では神社遺構が残っている場所は少ない。植民地支配のシンボルとして日本の敗戦後焼き討ちされたり、朝鮮戦争時に破壊されたり、経済成長の過程で取り壊されたり、といった複合的な要因があると思われる。神社と植民地支配の結びつきは知られているが、「この場



台湾神社跡（現 圓山大飯店）台北・台湾



南洋神社跡 コロール・パラオ



樺太神社跡 ユジノサハリンスク・ロシア

所に神社があった」という土地の記憶は薄れつつあるように思う。ロシアでは、ほとんどの人が神社の存在を知らず、神社跡地は荒れ放題である。パラオでは空襲で焼けた南洋神社跡地に日本人によって小さな祠が再建されている。神社跡地には国会議員の家が建っており、財政の多くを観光と援助に頼る国が旧宗主国に配慮する姿が見えてくる。中国ではまだ長春と上海にしか行っていないが、経済成長による街の再開発が遺構の今後を決めるように思われる。

今後は大日本帝国の勢力範囲が神社跡地を通して見えてくるよう、中国を中心にして撮影を継続していく予定である。



朝鮮神宮跡（現 南山公園）ソウル・韓国

2012 年度 非文字資料研究センター 第2回公開研究会

帝国後 海外神社跡地の景観変容 —台湾の事例を中心に—

日 時：2012 年 12 月 15 日（土）13:00 ～ 17:00

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 16 号館 地下 1 階 視聴覚 B 室

開会挨拶：田上 繁（非文字資料研究センター長）

趣旨説明：津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）

報 告：菅 浩二（國學院大學 研究開発推進機構研究開発推進センター 准教授）

中島 三千男（神奈川大学 学長）

津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）

コメンテーター：蔡 錦 堂（国立台湾師範大学台湾史研究所 副教授）

司会・進行：橘川 俊忠（神奈川大学法学部 教授）

『帝国後 海外神社跡地の景観変容』 （公開展示・公開研究会）について

津田良樹

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究プロジェクト「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班は、非文字資料研究センターの公開展示として稲宮康人写真展『帝国後 海外神社跡地の景観変容』を 2012 年 12 月 11 日（火）～ 20 日（木）にかけて神奈川大学 16 号館ホワイエにおいて開催した。また、この写真展開催期間中の 12 月 15 日（土）に『帝国後 海外神社跡地の景観変容—台湾の事例を中心に—』として公開研究会を実施した。

戦前期に「大日本帝国」が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や旧満洲国を中心とした中国の侵略地に創設した神社が海外神社である。その数は 1640 社に上るとされているが、敗戦とともにすべての神社で機能は停止し、多くは現地人や日本人の手によって破却された。

公開展示である写真展は、「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班の研究協力者であるフリーランスのカメラマン稲宮康人氏によるもので、氏が共同調査中、あるいはそれ以前から撮りためた海外神社跡地の景観に関わる写真を中心にすえ、神社時代の古写真を添えたものであった。内容は戦前期に海外で造られた神社で、伊勢神宮を頂点にした神社機構のなかで社格を付与された



津田良樹氏

神社の現在の景観を中心としたものである。研究センターの共同調査として行った台湾の神社跡地調査の成果も反映させ、海外神社を全体と部分の両面から眺めることが意図されていた。さらに、日本国内の戦前期に創建された靖国神社や樫原神宮などを併せて展示することにより、今日の日本社会のなかに潜在している神社と歴史との関係性についても問題提起するものであった。ところが、海外神社の現状の景観写真のなかに国内の神社の写真を混入させての展示は、必ずしも意図を明確に伝えられたかどうか、単純に海外神社のなかになぜ国内神社が混在しているのかとの疑問を生じさせることにもなった。展示の配列やキャプションに適切な工夫が必要だったのではないかと反省される。それでも、マイナーなテーマである上、街中から外れた大学内のホールのホワイエでの開催という悪条件にもかかわらず 150 名ほどの見学者があった。

なお、公開展示図録は『日本写真年鑑』2013 年版（日本写真協会）に収録された。

公開研究会は、國學院大學の菅浩二氏の「台湾神社宮司・山口透と寺廟」、神奈川大学の中島三千男氏の「歴史・文化の三度の造り替え—台湾明延平郡王祠、旧開山神社を素材に一」、津田の「台湾神社から台湾神宮へ」の 3 本の報告に、コメンテーターとして国立台湾師範大学台湾史研究所の蔡錦堂氏を迎え、法学部の橘川俊忠氏の司会で実施された。

菅氏の報告は、台湾総督府下における海外神社と在地の寺廟の関係についての報告であった。すなわち台湾神社宮司を創設以来 36 年間務めて 1937 年に引退した山口透（翌 38 年死去）の思想と、時期的には山口引退後にあたる 1939 年に中壠郡守として寺廟全廃計画を推進する宮崎直勝の論理の検討である。山口の引退がいわゆる「皇国臣民化」政策が推し進められるちょうどその時期に当たっているとの認識の上で、山口は終始一貫して在地の信仰すなわち祠廟を尊重する姿勢を持ち続けたとし、その対極に宮崎の寺廟整理を位置づける内容であった（詳細は菅氏の別稿参照）。

中島氏の報告は、鄭成功の廟であった明延平郡王祠（旧）が、開山神社と改変され、戦後明延平郡王祠（新）として復活する変遷のなかに、歴史・文化の創り替えを読み解こうとするものであった。明延平郡王祠の元は鄭成功を祀る開山王廟という現世利益的なものであったが、清王朝のナショナリズムの下にまず明延平郡王祠（旧）が造られた。その明延平郡王祠（旧）が日本の植民地支配の下に開山神社とされた。神社とはなったが当初は建物には大きな改変はなかったが、1941 年皇民化ということで日本の神社建築風に大きな改変が行われた。さらに、日本の敗戦後、国民党政権の下で、台湾支配の正当化として明延平郡王祠（新）が再建されるというような内容であった（詳細は中島氏の別稿参照）。

津田の報告は、台湾の総鎮守であった台湾神社から台湾神宮への昭和造替・遷座の様相を『台湾日日新報』などの文献資料により跡付け、さらに現在ではまったくわからなくなってしまった新社殿の様相を古地図・航空写真・現地調査をもとに検討した（詳細は、『年報 非文字資料研究』第 8 号参照）。また、現地調査により発見した新社殿の遺構である地下神殿（御神体の避難施設）について紹介し、同様な事例が旧満洲国の建国神廟にも存在することなどについて報告した。

これらの報告について、蔡氏よりそれぞれにコメント



コメンテーターの蔡錦堂氏

があった。主なコメントの内容は以下のようである。

菅報告に関しては、宮崎郡守の寺廟整理の評価について、宮崎の狙いは財産目的であり、彼の論理は寺廟整理を正当化する単なる口実であったのではないかと指摘がされた。

中島報告に関しては、戦後になって明延平郡王祠（新）において神式の儀式が、戦前期に神職の訓練を受けた台湾人によって行われた事実が指摘され、その事実をどう解釈すべきかが問われた。

津田報告に関しては、台湾神社で発見された地下神殿と同様な地下施設が台南県の新化神社でも見つかったとの紹介があり、新化神社は昭和 18・19 年ころに造られており、台湾神社や満洲国建国神廟の造営期ともほぼ一致している。時期的に見て、空襲に備えた防空壕のようなもので、この時期の神社には他の神社にもあったのではないかと指摘があった。

蔡氏からは、以上のほか新たな資料の提示や今後の課題などについての指摘もあり、それらを巡って活発な議論が行われた。また、大里浩秋主任研究員から飛び入りで台湾神社の新出の写真資料の紹介があり、当日参加いただいた元台湾神社宮司山口透の孫に当たられる山口坦氏御夫妻から山口透に関するお話をいただけるなど多彩な内容となった。

とはいえ、司会の橘川氏の締め言葉にあったように、台湾に限ってもまだまだ問題を多く残しており、いまだ一般論として成立するような状況に至っていないことが確認され、海外神社研究の一般論に至るにはさらに一つ一つの神社の実態を解明する努力を積みかさねる必要がある。また、海外神社という日本の過去の姿をプラス面、マイナス面を含めて解明することに大きな意味があると思われる。

なお、公開展示・公開研究会については、『神社新報』（2012 年 11 月 26 日）や『週間金曜日』で案内記事が

掲載され、公開研究会の当日の様子が『中外日報』（2012年12月20日付）で紹介されるなどの反響があった。

歴史・文化の三度の創り替え—台湾明延平郡王祠、開山神社を素材に—

中島 三千男

本報告は、17世紀に、明国福建の人鄭芝龍と平戸藩士の田川氏の女（松）との間に、平戸で生まれ、後、大陸に渡り「反清復明」の戦いを起こすが、敗れて台湾に渡り、オランダ人（東インド会社）を駆逐し、台湾において最初の漢人政権を打ち立て、その意味で台湾の「開発始祖」として、今日に至るまで台湾・中国本土の漢民族の厚い崇拝を受けている、鄭成功（1624年～1662年）の死後の廟が今日に至るまで、どのように、その外観を変化させ、その機能を変化させてきたのか、という事の報告である。

鄭成功の死後、台南の「百姓」住民によって小廟祠が建てられ、「延平郡王」（鄭成功の尊称）として祀られていたが、1683年に鄭氏三代の台湾統治が終焉し、清朝の領有化に入ると「百姓」住民は多くを語ることを忌避、以降、廟の名称を「開山王廟」とし、鄭成功を「開台聖王」と蔭称して、「誠心敬」、「心同敬」、「合心敬」という3つの神明会（地域住民組織）を組織して奉祀・運営を行っていった。18世紀の中頃に規模広大なる神殿（125坪）に改められるなど、幾度かの改変を経験したが、基本的にこの「開山王廟」は風水害などを防ぐ台湾住民の現世利益信仰の対象として尊崇をあつめていた。

「最初の創り替え」

こうしたあり方に大きな変化を及ぼしたのは19世紀半ばの東アジアの国際関係であった。1874（明治7）年の、3年前に起きた台湾に漂着した琉球漁民の殺害事件（宮古島民殺害事件）を口実とした、日本の台湾出兵である。日本軍は5月に長崎を出港、日本兵3500人が台湾・屏東に上陸占領した（中国では牡丹社事件）。これに對抗して、清国も同じ5月に、日本軍に圧力をかけるために、沈葆楨を国防及び外交の欽差大臣として3000名の兵士とともに台南に派遣し、日本軍と対峙した。この事件そのものは、その後の北京での外交交渉の結果、その年の12月に日本軍が撤退して解決するが、沈葆楨は同年、台湾に住む人々の願いを酌んで、鄭成功は「明王朝の遺臣であって清王朝の逆賊にあらず」「最後まで節義



中島三千男氏

を貫いて国のために自らの命を捧げ、水害・干害に当たっては天に祈った。台湾に対する貢献は非常に大きい」として、鄭成功に諡（おくりな）を追号するとともに、祠を建てて正式に祀る事を朝廷に奏請した。沈の意図は鄭成功の「忠烈大節」と共に、台湾百姓の「民族大義」の心を振起し、外侮を防ぎ、日本の侵略軍を駆逐することであった。いわば、清朝政府による「伝統の創造」であった。

翌1875年正月10日、清朝政府（光緒帝）は聖旨を批准し、鄭成功に「忠節」の諡を追号するとともに、鄭成功の専祠を勅建し、国家の祀典に列し、春秋2祭を行うことを決定した。沈はこれに基づき「開山王廟」を改称して「明延平郡王祠」（以下、旧を付す）とするとともに、廟を新築し、社地も672坪と拡大した。これが最初の「創り替え」である。

「二度目の創り替え」

清朝政府によって、まさに日本の侵略を防ぐために、台湾住民の「民族大義」を振興する目的をもって建てられた「明延平郡王祠」（旧）は、日清戦争後、皮肉にも、日本の統治を正当化する台湾の最初の神社に改変される。1896（明治29）年、台南県知事磯貝静蔵は鄭成功の忠烈と母親田川氏の貞烈（鄭成功の功業に和して大陸に渡ったが、清朝に服することを拒否して自害した）を讃え、総督桂太郎に神社創設を建議した。これを受けて翌年、総督府は県社開山神社の創設を許可、ここに「明延平郡王祠」（旧）は県社開山神社と改称された。日本人の母親を持ち、日本の平戸で生まれた鄭成功は、日本人の台湾統治を正当化するシンボルと読み替えられたのである。これが、「二度目の創り替え」である。

しかし、県社開山神社と改称されても、結構は「明延平郡王祠」（旧）を利用したため、福州式の三進双護龍主建築といわれる、中国の伝統的な廟建築様式のままであった。変化といえば鳥居が新しく付け加えられただけ

であった。この結構に大きな変化があったのは、まず、1910（大正4）年の大改築であった。鄭成功（延平郡王）を祀る前殿（本殿）の前に、日本式の拝殿を新設、また社務所、淨手処（手水舎）、神職宿舍、歩道なども新設され、華表（鳥居）も移設された。境内もこれまでの十数倍の9400余坪に拡大された。こうして開山神社は旧来の延平郡王祠（廟）と日本式神社建築の「合一」の建物となった。さらに、こうした廟の神社化を一層推し進めたのが、1941年の大改築である。台湾において1930年代後半以降、1940年代初頭まで、皇民化政策の一環として、在来寺廟の統廃合（「寺廟整理運動」＝台湾版廃仏毀釈運動）が進行したが、こうした背景のもと、創立40周年を前に、また将来官国幣社への昇格に備えて、新たに、流造の本殿と幣殿・拝殿を神廊でつないだ新社殿が新築され、純日本風の社殿が完成した。ただし、従来の前殿（本殿）等の建物は破壊されず「記念物」として残されたため、外見的には廟と神社の「合一」、「二重性」は尚残されたが、理念的には開山神社の神社化が「完成」したのである。

「三度目の創り替え」

1945年8月、日本の敗戦、台湾の植民地支配が終焉するとともに、県社開山神社は再び明延平郡王祠（新）に戻される。国民党政府は日本統治の痕跡をなくすために、日本式の建築をなくす政策をとる。開山神社と改称して以降、1941年に新築された新社殿の撤去などが行われるが、この日本統治の正当性を象徴する開山神社から明延平郡王祠（新）への回帰を象徴するものが、鳥居の改変である。

1947年、鳥居の笠の部分及び開山神社と書かれた額が取り外され、代わりに国民党徽・晴天白日徽と「忠肝義膽」と書かれた横書が掲げられた。この「忠肝義膽」の横書は、1947年の国民党政府による台湾住民の虐殺事件である「2.28事件」の後、蒋介石から「來台宣撫」の任を帯びて南京より呼び寄せられた、白崇禧国防部長（国民革命軍一級上將で「小諸葛」の称を持つ、抗日名将であり、また著名な作家白先勇の父親でもある）の手になるものである。

また、その後、これまでの曲線が優美な福州式建築は「講求氣勢」の北方式建築に改築され、本殿や三川門など、開山神社時代にも残されていた、明延平郡王祠の歴史的建築物としての価値は失われてしまった。これが、「三度目の創り替え」である。

このように、開山神社は、歴史的には鄭成功を祀る私廟としての「開山王廟」が、1875年に日本の台湾出兵に対応して、台湾人の民族的大義を振起すための、清朝の国家的廟「明延平郡王祠」（旧）に改編される（「最初の創り替え」）。ところが、日清戦争後台湾が日本の統治下におかれると、鄭成功が日本人の血を引くことが最大限に利用されて、日本統治の正当性を象徴し台湾の民心を収攬するために、台湾における最初の神社・開山神社に改編される（「二度目の創り替え」）。しかし、これも、日本の敗戦後、台湾に入ってきた国民党政府によって、大陸反攻のシンボルとして、「明延平郡王祠」（新）として復活する（「三度目の創り替え」）。

17世紀の末に建てられた、鄭成功を祀る宗教施設が台湾を統治する中・日の政権によって、3度の読み替え、「創り替え」が行われて今日に至っているのである。

本報告は、以上の流れを報告すると同時に、研究史的には「最初の創り替え」の意味がこれまで、十分に位置づけられて来なかったこと、また「三度目の創り替え」が行われて以降、現在においては「明延平郡王祠」（新）は「大陸反攻」のシンボルとしてより、台湾における文化財・観光資源としての位置づけが重視されているが、その変化、を特に祀られている鄭成功像にも着目して研究する事的重要性を指摘した。



全体討論で会場からの質問に応える報告者とコメンテーター



全体討論の様子

「台湾神社宮司・山口透と寺廟」

菅 浩二

発表者はこれまで、中島三千男先生をはじめ諸先学の業績に導かれながら、主に台湾総督府および朝鮮総督府下の神社について、特に祭神に注目して研究対象としてきた。『日本統治下の海外神社』（弘文堂、平成 16（2004）年）を上梓してのちは、宗教と近現代ナショナリズムの関係一般というより幅広い構図に近代日本の事例を位置づけ、更にその中に大日本帝国の植民地神社の事例を置きながら解釈を進めるべく、試行錯誤を続けている。

本公開研究会の主題は「海外神社跡地の景観変容」であるが、発表者の関心は「景観」ではなく、祭神への信仰・思想、およびそれによりもたらされる社会的な統合様態にある。それゆえに本発表が会の主旨に合うかは不安ながら、以下に台湾神社宮司を 36 年間務めた山口透（安政 3（1856）～昭和 13（1938））の生涯と思想とを一つの軸として、台湾総督府下における神社と在来信仰の関係について述べてみたい。

植民地の神社を「国家神道の海外進出」と説明した最初の実証者は、明治末より日米開戦直前まで日本に住み、宣教師・教育家・宗教学者として活躍した米人 D・C・ホルトムである。ホルトムは、日米戦争中の著書 Modern Japan and Shinto Nationalism（1943、邦訳『日本と天皇と神道』昭和 25 年）で、国家的要請のもとに世界主義を指向する神道の将来を制約する三つの要因として、以下のように述べる。

「一、誠の神髄は政府に従順である所に成立つという、政府によって導き出された理論

二、国家主義の膨張の過程は、被征服国民の完全な同化を随伴しなければならぬという考え

三、神道と政治とは不可分であるとする両者の関係」ホルトムはこうした海外進出の実例として、台湾での「神道の儀式にはかならず参加するように、また各家庭にはかならず神棚を設けさせる」との政策を挙げている。

ただ、当時の欧米研究者で神社参拝強要等の問題に最も関心を持っていたであろう彼も、植民地での同化政策と神社の関係については、1930 年代後半以降の実例しか挙げていない。宣教師の報告書などその他の歴史資料も、植民地において神社参拝が前面に押し出され、信教の自由が圧迫されるようになるのは、1930 年代半ば以降のことであることを示している。この時期はいわゆる「皇民化」期としても知られるが、ちょうど台湾神社初



菅浩二氏

代宮司・山口透の引退（昭和 12 年）および翌年の死と時期的に重なる。

台湾神社とは、明治 34（1901）年 10 月 27 日に、台湾総督府下の総鎮守として台北市に鎮座した神社である。社格は官幣大社で、祭神は大国魂命・大己貴命・少彦名命の三柱一座と、近衛師団長として「征台の役」に出征、台南に風土病に斃れた北白川宮能久親王一座の、四柱二座である。昭和 19 年 6 月 17 日に天照大神一柱一座の増祀が発表され「台湾神宮」に改称しているが、昭和 20 年の日本敗戦に伴い廃絶した。山口はこの総鎮守存続期間の約四分の三の間、宮司職にあつて、台湾神職の指導的立場にあつたことになる。

福井藩士族に生まれ、明治 5 年に上京、儒学者・林鶴梁の塾で学び、次いで伊勢の神宮教院本教館を経て教員となった山口は、日清戦争後に従軍布教師として神宮教より、大連湾そして台湾に派遣された近衛師団に従っている。大連湾では日本新聞記者・正岡子規との邂逅もあった。そして台南で能久親王の病氣平癒祈願を行った従軍神職も、山口その人である。彼はこうした経験から、台湾神社創建に際し、初代宮司に抜擢されたものとみられる。延平郡王祠（鄭成功廟）即ちのちの開山神社の学術調査を、初めて行った日本人も彼である。

台湾を南進する近衛師団における回顧談として、山口は以下のように述べている。

「これも彰化での事であるが、兵士たちがその地の孔子廟に寝泊まりする際、孔子や顔氏等の成人の像を取り出し、それを枕にして泊る者があつた。私はそれを見て、台湾人が此の事を聞いたら何と思ふだろうと、それは止めて貰ひたいと将校に願つて止めさせたこと等があつた。」（「山口宮司の領台回顧談」『台湾日々新報』昭和 10 年 6 月 17 日号 井出季和太『南進台湾史考』誠美書閣 昭和 18 年 に再録）

山口は漢学の素養によるものか、在来信仰、特に「祠廟」に対する敬意の必要を熱心に説く人物であつた。明



会場の様子

治 41（1908）年に鄭成功廟は部分的に神社風に改編されるが、彼はこの時以下のような意見書を当局に提出している。

「祭祀には其の国に各典型あり、孔子を祭るには釈奠の儀を以てし、仏陀を礼するには三宝の式を以てす、是れ礼なり、若し礼儀の外に出で、崇敬と同化とを図るは妥当ならざるべし。要するに今日の開山神社は、本島人は更なり。内地人も其の帰向に迷へるは事実なり。聞く今や祠堂修築の議ありと。然らば此の期に於て、宜しく祠廟の古制に復し、其の祭儀は文武廟に於ける如く、一に古礼に基づき、殿堂門廡過べて其の旧観に復し、敢て変更せず地方の名祠を崇褒せしむるを主とせられなば民心初めて安んじ、王の靈亦必ず首肯せらるべし云々」（「神社と祠廟」（中）『皇国時報』昭和 8 年 2 月 11 日号）

山口の祠廟尊重の姿勢は、宮司在任中一貫しており、晩年も以下のように述べている。

「神社は建国以来、日本民族の伝統的尊信せる国家の宗祀なり。祠廟は革命漢人種の時代的崇仰せる国家の通祠なり。右は歴史上其の体面を異にせるも、結局国家的正義人道に基づき、謂ゆる東洋道徳の精粹に帰着せるは同一にして、彼の欧米諸国の個人主義、唯物偏重より成立ちたる社会道徳とは、初めより其の出発点を殊（ママ）にする者あるは、固より論を俟たざるなり。」（「台湾に於ける神社と祠廟」台湾神職会機関誌『敬慎』昭和 9 年 12 月号）

台湾総督府施政開始と同時期に、山口らが提出した「神宮教台湾布教願」と、昭和 19 年の台湾神宮号への改称時の「内務大臣謹話」を読み比べてみよう。前者で宗教として布教意義が説かれる皇祖神信仰について、後者では、内務大臣が「近時」島民の「敬神ノ念亦益々威烈ヲ加ヘテ参リ 皇祖天照大神ニ対シ奉ル崇敬欽行ノ念ハ湧然トシテ興起致シタ」と、「非宗教」的にその流布達成を宣言する。両者の間には皇祖神信仰の質的転換があり、山口の後半生がある。無論、山口が如何に台湾神社界の

有力者であっても、彼一人の死がそのような質的転換をもたらした訳ではなかろう。しかし晩年「従軍遺老」と称した彼の死は、「歴史」としての台湾開拓が年を重ね、歴史に先立つ「神話」としての「征台の役」を知る世代が絶えつつあることを象徴していただろう。そしてこうした世代転換は、皇祖神信仰また神社と在来信仰の関係の転換をも象徴しているのではないか。

「皇民化」期の、地方庁主導による在来信仰圧迫の顕著な事例として知られるのが、本日もご参加の蔡錦堂先生が研究された「寺廟整理」である。多少特異な例ながら、昭和 14 年に、総督府の制止すら振切る形で中壢郡守として寺廟全廃計画を進めた、宮崎直勝の論理を見てみよう。

「諸君を日本人として守護する神、これは日本の神でなくしてなんでありませう。寺廟の神は即ち日本の神であります。…しかるに民族のみ神におくれて、いまだに真の日本人になりきれぬとすれば、神に対して申訳もない次第であります。…即ち寺廟廃止は諸君の神の意思の命ずるところであります。」

「寺廟神が宗教神であることは疑ひの余地がない。とすれば宗教神と神社神とを混同して合祀するといふ思想は正しいかどうか、学説なり研究なりでなく、僕達地方官がこれを取りあげて民衆を指導することについては大きな責任を感じるのだ。」

（『寺廟神の昇天 台湾寺廟整理覚書』東都書籍 昭和 17 年）

「神社神」と「宗教神」の語も見えるが、ここには「神社非宗教」により「宗教」を回収しようとしつつ、結局果たせない状況が示されている。更に、「祠廟」と「寺廟」とでは微妙にずれるものの、ともあれ在来信仰に対する態度としては、この山口の見解と宮崎の論理は転倒関係にあるといえよう。

即ち、多様な祭祀の共存並列により「帝国」の祭祀空間成立を考える山口に対し、宮崎は同化統一された祭祀空間内でこそ神々が共存する、と見なしている。前者では結果と考えられた「帝国」の祭祀空間が、後者では前提条件ととらえられているのである。この間には、〈国家が生き延びるための戦争動員〉から〈戦争動員に備えた効率的国家作り〉に転じた、総力戦体制構築による社会変容と同じ構造転換が存在する。このような、総力戦とシステム社会と多民族帝国、という観点からも海外神社の問題を考察することで、更に様々な分析視角を得るべく、努力していきたい。

2012 年度 神奈川大学 人文学会・非文字資料研究センター 共催講演会

カメラが開く記憶の扉 中国ドキュメンタリー映画の試み

日時：2012 年 11 月 16 日（金） 13:00 ～ 16:10
会場：神奈川大学横浜キャンパス 23 号館 205 教室

講師：呉文光 鄒雪平 章夢奇（ドキュメンタリー映画監督）
通訳・解説：秋山珠子（神奈川大学 非常勤講師）
開会挨拶：大里浩秋（非文字資料研究センター 研究員）



「村民映像計画」について語る呉文光氏（左）と、筆者（右）。最前列に座るのは鄒雪平氏（左）と章夢奇氏（右）。撮影：久保田桂子氏

2012 年 11 月 16 日、神奈川大学人文学会と非文字資料研究センターの共催で、中国ドキュメンタリー映画のパイオニアであり、ドラマトゥルクとしても知られる呉文光、注目の若手女性監督である章夢奇、鄒雪平の 3 氏を迎え、講演会「カメラが開く記憶の扉—中国ドキュメンタリー映画の試み」が開催された。日中国交正常化 40 周年の年、尖閣列島の国有化以来、日中関係は緊張し、公的機関に属する中国人の来日キャンセルが相次ぐ中、フリーランスの彼らのフェスティバル／トーキョーによる招聘はあっさり実現し、講演には百余名の熱心な参加者が集い、予定を 30 分余り超える質疑応答も行われた。

呉文光—中国ドキュメンタリーを切り拓く

呉文光は 1988 年、国に配属された昆明のテレビ局を辞し、自由な創作を志して北京に来了。フリーランスの先駆けである呉のような若者は、当時の改革の落とし子でありながら、あくまで社会の異端的存在だった。カーキ色の綿シャツを着、黒い布靴を履いた大柄な呉は静かに口を開く。「覆い隠された社会の『真相』を描きたい—その思いは当時も今も多くの中国ドキュメンタリストが共有しています」。若き呉は独力で、自分と同様、職を捨てた地方出身の芸術家志望の友人達の日常をビデオに撮り始める。処女作『流浪北京：最後の夢想家たち』（1990）は、呉自身「予期せぬ変化」—1989 年の天安門事件を跨ぐ若者達の、熱狂から沈黙への反転—を生々しく切り取り、中国ドキュメンタリーの嚆矢として高く評価される。以降呉は、文革時代の元紅衛兵達の素顔を描く『私の紅衛兵時代』（1993）や、『流浪北京』で海外に活路を求めた登場人物達の 5 年後の夢と現実を追う

『四海我家』（1995）など、未踏のテーマの作品を次々と発表し、プロパガンダが主だった中国でドキュメンタリーの新たな地平を拓いていく。

二つのプロジェクト—小川紳介を受け継ぐ

だが、国外映画祭の寵児となった華やかで多忙な 90 年代、呉は個人で創作し続けることに限界と疑問を感じ出す。「ドキュメンタリーは単に監督の勲章なのか？ もっと中国の現実にコミットできないのか？ そう考えた時、故・小川紳介監督の言葉が蘇りました」。1991 年、初来日した呉はドキュメンタリー映画の巨人、小川紳介と邂逅する。スタジオに日参する呉に小川は、三里塚闘争や山形の農村を描いた自作を見せ、語ったという。「ドキュメンタリーは、少数の人間が作るだけでは不十分だ。より多くの参加者を集めることが大切なんだ」¹。

2005 年、呉は北京郊外に草場地工作坊（CCD）という、スタジオ、アーカイブ、上映・上演スペース兼住居を構えると、小川の言葉を実践するような活動に乗り出す。中国全土から募集した農民 10 人にデジタルビデオカメラ（DV）を託し各自の村で作品を撮らせるプロジェクト、「村民映像計画」を立ち上げたのだ。「それまで語る手段を持たなかった農民達は、DV を手にした途端、実に饒舌に語り出しました。晩年の小川監督は自ら田を耕しながら撮りましたが、私は農民自身に撮らせたのです」。協同性と当事者性—それが、呉が受け継いだ小川の間とともいえる。

「プロジェクト発展には、農民に加え、教育を受けた若い世代の参加が重要でした」。2010 年呉は、章夢奇とこの顔末は呉文光「高山を仰ぎ、なお止むことなし」（『neoneo』02：68-69）に詳しい。

鄒雪平を含む 80 年代生まれの若者 21 名をメンバーに加え、各自がゆかりの村で埋もれた記憶を記録する「民間記憶計画」^{メモリープロジェクト}を始動させる。共通テーマは 1959 ～ 61 年に全国に及んだ飢餓の記憶。「正規の歴史からもれた、普通の人の普通の記憶を記録したいのです。飢餓の記憶の主役は、文革や反右派闘争とは異なり、知識を持たず、声を発してこなかった普通の人ですから」。

章夢奇と鄒雪平—現実と歴史の間に迷い込む

だが、若者達による記憶の記録は難航する。明るい紫のカーディガンに焦げ茶のミニスカート姿の小柄な章夢奇が口を開く。「幼い頃、離婚した母に引き取られた私は、父が育ったその村の名さえ知りませんでした」。幹線道路からの距離を示す標識だけが目印のその村を章は「47km」と呼んだ。耳が遠くインタビューが理解できない老人、収入にならない章の活動を訝しむ親族…。「村での 2 年間は、現実と歴史の間をさまようプロセスでした」。村での第 1 作『自画像：47km』（2011）の中で、舞踏家でもある章は、林立する無表情な人々の間を「丁奇！丁奇はどこ？」と絶叫しながら彷徨うパフォーマンスを行う。父の姓から丁奇と呼ばれ、「アイデンティティの分裂」に苦しんだ章は、しかし、インタビューを続ける中、徐々に村人と関係を築き、59 ～ 61 年の間に村で 14 人が餓死したことを明らかにし、村人とともに死者のための碑を建てるに至る。続編『自画像：47km の村で踊る』（2012）で章は、木立の中、木々に掲げられた老人達の穏やかな笑顔の写真の間を泳ぐように踊る。前作とは対照的な、静かなパフォーマンスだ。

章とは異なり、鄒雪平が撮影したのは生まれ育った村だ。だが、黄色の T シャツに緑のパーカーを羽織った鄒は言う。「撮影前、私は老人達と親しくもなく、彼らの歴史についても全く無知でした」とは言え、顔なじみの鄒がインタビューを始めると、村人達は進んで埋もれた過去を手繰り寄せ、淡々と語り出す。「父も 11 歳の長男も餓死したよ。長男の名はもう忘れたがね」。鄒は証言した老人達を集め、処女作『飢餓の村』（2010）を上映する。映像を見て初めて涙ぐむ老人達は、「中国のど

こで上映してもいい。事実だから」と口を揃えるが、海外上映には難色を示す。「ダメだ。国を売るみたいだろ」。だが村の小学生達に同じ映像を見せるときっぱりと言う。「外国にも同じようなことってあるよね？ これを見たら、ぼく達のこと、きっと分かってくれるはずだよ」。子供達は進んで、鄒とともに、飢餓の記憶を尋ね、老人達から寄付を集め、餓死者のための碑を建てる。最新作『子供達の村』（2012）で鄒は、呉がしたように、子供達にカメラを託し、そのプロセスを記録させている。

誰もが記憶の記録者である

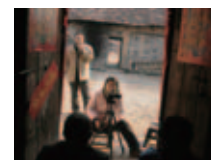
碑を建てる彼らの行為に当初私は違和感を覚えた。それにより、却って記憶の固定化と風化が進むのではないか？ だが章と鄒がそれぞれの村で建てた黒い碑を見て私は虚を突かれた。ある者の生年には「？」が付され、ある者は下の名の代わりに「～氏」や「～××」と記されている。碑には、死者の姓名と生没年のみならず、記憶の欠落も刻まれていたのだ。章は慎重に言葉を綴る。「記憶は、乱雑に物が積み重なった倉庫のようなもので、急に扉を開けると中はぐちゃぐちゃになっています。でもそんな記憶を互いに照応させる作業こそが大切なんです」。冷たく硬いはずの碑は、人々が古い切れ端を持ち寄って縫い合わせる未完成のキルトのように、未来の更新に向けて柔らかくつなぎ合われている。呉が引き取る。「民間記憶計画は大海の中に飛び込むようなものでしかないし、ドキュメンタリーは真実をめぐる個人のプロセスしか記録できないものかも知れません。でも誰もが記憶を記録することができます。プロセスをたどることで個人は責任を果たしうのです」。

講演会後に寄せられた感想から私は、あの教室に、祖父母の記憶を記録したいと考え始めた人や、既に撮影を始めている人がいたことを知った。2013 年 5 月、うち一人は作品を完成させ、CCD で行われた芸術祭に参加したと聞く。「誰もが記憶の記録者である」—民間記憶計画のスローガンは、国境を越え、すべての人に向けて静かに開かれている。

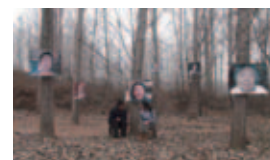
（文責：秋山珠子）



CCD で「民間記憶計画」について議論するメンバー



撮影をする章夢奇



章夢奇「自画像：47km で踊る」



鄒雪平と子どもたち



鄒雪平「子供達の村」

「グローバル時代と東アジアの文化表象Ⅰ」の報告

内田 青蔵（非文字資料研究センター 研究員）

はじめに

2013年2月1日から2日までの2日間、韓国ソウル市の漢陽大学校東アジア文化研究所主催による「グローバル時代と東アジアの文化表象Ⅰ」をテーマとした国際学術会議が開かれた。開催の2日間は、あいにくの雨模様であったが、パネラーの発表は注目すべきものが多く、熱い議論が展開された。本学の非文字資料研究センター（以下、本学センターと記す）と漢陽大学校東アジア文化研究所とは学術交流の提携を結んでおり、そのため筆者と金容範氏の2名が本学センターを代表して参加し、発表を行った。本稿は、この国際学術会議の概要報告である。

さて、この国際学術会議の発表者とそのテーマは、以下の通りであった。

- ①金容範（神奈川大学 非文字資料研究センター）
韓国近・現代の住居文化の表象としての文化住宅—‘生活の近代化’から‘農村の近代化’に至るまで—
討論：富井正憲（漢陽大学校 建築学部）
- ②内田青蔵（神奈川大学 建築学科／非文字資料研究センター）
“洋風”から“和洋併存”あるいは“和洋混交”へ—明治初期の和洋館並列型住宅様式の成立過程にみる国家的住宅様式の誕生に関する一考察—
討論：韓東洙（漢陽大学校 建築学部）
- ③李京僖（漢陽大学校 東アジア文化研究所）
揺れ動く＜日本的＞な富士山
討論：李漢正（祥明大学校 日本語文学科）
- ④丁秀珍（東国大学校 教養教育院）
無形文化財から無形文化遺産へ—グローバル時代の文化表象
討論：ナムクンウ（東国大学校 教養教育院）

- ⑤朴美貞（国際日本文化研究センター）
絵葉書というテキストと植民地朝鮮
討論：河世鳳（韓国海洋大学校 東アジア学科）
- ⑥睦秀炫（ソウル大学校 奎章閣韓国学研究院）
韓半島地形の視覚的表象—主体の眼と他者の眼
討論：權幸佳（韓国芸術綜合学校）
- ⑦菅浩二（國學院大學 研究開発推進センター）
日韓同祖論と神社
討論：朴奎泰（漢陽大学校 日本語・文化学部）
- ⑧裨寛紋（韓国外国語大学校 日語日文学科）
＜神国日本＞のイメージ変遷
討論：南相旭（成均館大学校 比較文化研究所）
すなわち、発表者は8名で、その内訳は、日本在住の研究者が4名、韓国在住の研究者が4名であった。会議は、発表者が発表を終えた後に、それぞれの討論者が具体的な質問を投げかけ、議論を開始し、会場からも質問を受けるという形式で行われた。また、会場では、同時通訳も行われた。なお、当日は、各発表の内容の原稿をまとめた配布物も用意されたが、論文はそれぞれの言語によるものであった。

非文字研究関連の発表について

本学非文字資料研究センターからは筆者と金氏の2名が参加し、初日に発表を行った。金氏は、主題は「韓国近・現代の住居文化の表象としての文化住宅」、副題は「‘生活の近代化’から‘農村の近代化’に至るまで」とし、発表を行った。金氏は、現在、本学センターの研究員として所属しているが、会場校である漢陽大学校建築学部 of 卒業生で、韓国の近代住宅史研究で学位を取得されている若手研究者である。さて、その報告内容は、韓国の近現代住居文化を考えるうえで注目される3つの時代の建築を取り上げ、その時代と建築のあり様が当時の政策

と極めて深く関わったものであることを論じたものである。その3つの時代とは、1920年代以降に日本の影響を受けて出現した「文化住宅」、戦後の都市化の中で誕生した1960年代のアパート、そして、1970代に展開された農村の近代化の中で生まれたセマウル住宅である。これらは、今日の韓国の住まいや住文化に大きく影響を与えてきたものであり、こうした建築や生活スタイルが実はその時代の政策と直結した中で大きく変わってきたものであることを示し、それ故、今後の住まいのあり様を見定めるにはこれらの再考が必要であることを論じた意欲的な発表であった。とりわけ、分析にあたっては、当時の韓国で発行された新聞・雑誌などのマスメディアに登場した写真や広告・風刺画などの非文字資料を駆使し、非文字研究としても魅力的なものであった。

一方、筆者は、主題を“洋風”から“和洋併存”あるいは“和洋混交”へ」とし「明治初期の和洋館並列型住宅様式の成立過程にみる国家的住宅様式の誕生に関する一考察」という副題を添えて発表した。具体的には、明治以降の上流層の新しい住宅形式を取り上げ、国家的住宅様式の成立の過程として論じたものである。その主張するところは、上流層の住宅形式は明治当初の1860-70年代は「洋風」がめざされたが、1880年代（明治10年代後半）にはオーストリアやロシアの王室存続の手法を参考にしながら国会維持のための政策的変更により伝統性を重視した「和洋併存」「和洋混交」といったものへと変化したこと、ただ、その変更は伝統を尊重し継承しようとする内在的伝統継承の動きではなく、あくまでも「伝統回帰」という動きと解すべきものであったことを論じた。

本学センターから参加の2名は、ともに専門領域を建築史研究とするものであり、それ故建築を主題とする発表であったが、他の6名の発表は極めて多岐にわたる内容のものであり、各発表の資料も非文字資料を扱ったものが多く、興味深かった。そのうち、非文字研究という観点から見て特に興味深かったのが、国際日本文化研究センターの朴美貞氏による「絵葉書というテキストと植民地朝鮮」という発表であった。絵葉書は、本学センターでも非文字研究の基礎資料のひとつとして収集しているものでもあり、資料の扱い方や分析方法など大いに参考となるものであった。すなわち、朴氏は、これまで日本の植民地施政における「植民地イメージ」の解析として、戦前期に実施された「官展」に出品された日本人画家による「朝鮮の視覚表象」について通時的・共時的解析を

試み、その結果、その絵画の主題から、朝鮮表象の時代区分として「1910-21年：武断統治期」、「1922-36年：文化政治期」「1937-44年：戦争総動員期」の3つの時代区分ができること、具体的には「朝鮮の風俗全体を対象とした時代」、「独立運動で主導的な旧両班階層と労働に従事する既婚女性に関心を持った時代」そして「労働する男性への関心が増大した時代」といえることを明らかにしている。この時代区分をもとに、絵葉書の内容を整理・分類できる可能性を示唆し、今後の研究の可能性を示した。発表後は、絵葉書の解釈の問題や、他の植民地における研究の可能性についての質疑も活発に行われるなど、絵葉書を資料とする研究の可能性が感じられる発表であった。また、李京僖氏の「揺れ動く＜日本的＞な富士山」、睦秀炫氏の「韓半島地形の視覚的表象—主体の眼と他者の眼」、裨寛紋氏の「＜神国日本＞のイメージ変遷」も、映画フィルムから地図、絵巻物、紙幣などの多様で豊富な非文字資料を用いた研究であり、非文字資料を中心とした研究の大いなる発展性やその可能性を感じることができる発表が多かった。

結びにかえて

今回の国際学術会議は、発表者は8名と多くはなかったものの、各発表者には討論者がおり、発表後に内容を掘り下げた討論が行われるなど極めて刺激的なものであった。加えて、発表者の多くが非文字資料を駆使した研究を発表され、非文字研究の新たな可能性を感じることができた。今後もこうしたお互いが刺激し合うことのできる学術交流が行われることを大いに期待したい。なお、本会の国際学術会議は、韓国と日本の研究者によるものであったが本年6月に韓国と中国の研究者による同様の国際学術会議が計画されているという。同時通訳の問題もあって、3国による学術会議は難しいかもしれないが、次回は、3国による学術交流を期待したいと思う。



研究調査報告

『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究

フランス都市風景の歴史的変遷を探る

熊谷 謙介
(非文字資料研究センター 研究員)

2013年3月、フランスにおける都市風景画分析に必要な現地調査を行う機会を得た。2013年度にまとめる予定の18世紀ヨーロッパに関する生活絵引第1巻の準備として、革命前の啓蒙期の都市風景画・風俗画を美術館等で実際に観覧したり、図書館等で資料調査したりするとともに、実際に絵が描かれた場から写真を撮影することで都市風景の変遷を確認することが、今回の視察の大きな目的であった。

ヨーロッパの18世紀の生活に見られる風俗を分析する上で、絵画が描かれたであろう地点に200年以上の時を超えて立つ意義とは何か。一つにはヨーロッパ、とりわけ戦争による破壊が比較的少なかったパリに特徴的なことであろうが、長い時を超えて保存あるいはそのままの形で再建されている建築物が多く、現在でも当時に近い環境を見いだせる場合が多いということがある。都市の拡大に伴ってそれぞれの街区の象徴的意味は変化していくけれども、残された物からたどっていく考古学的視線によって、過去の都市風景の復元を試みることはできるだろう。第二に、過去と現在の間に断絶（都市改造、災害、再開発…）が認められる場合でも、ゲニウス・ロキ（地霊）と言ってもよいような土地の記憶が都市生活者の中に残存していたり、過去の破壊の代償として新しい表象があてがわれたりする現象が見られ、都市の無意識といったものを分析する上でも重要に思えるからである。

とはいえ、実際の調査にあたっては多くの困難があった。視点場の同定（同定できたとしても道路・建物等で撮影が不可能な場合もある）、写真撮影の際の画角や視点の限界（多くの絵画では、写真に比べ画角が広く（ワイド）、視点が低い）などである¹。ここでの調査報告ではこうした美学的問題はあえてとりあげず、一例を紹介することで、描かれているものとそれを取り巻く環境と

の関係から、都市風景の歴史的変遷を探ってみたい²。

Pont-au-change（両替橋）

両替橋はパリの中心シテ島と右岸を結ぶ橋であり、橋の上に両替商が多く店を構えていたことからその名が付けた。橋とはいっても店があまりに密集して立っていたので、通行人はセヌ川を見ることができなかったと言われている。中世以来、何度も橋は架け替えられたが、革命前夜の1786年から、ユベール・ロベールが描



図版1 ユベール・ロベール「1788年の、両替橋の家屋の取壊し」（1788）（カルナヴァレ美術館）



図版2 現在の両替橋（筆者撮影）

2 18世紀のパリ風景の視覚資料としては、とりわけ次の二つの画集を参照した。Alfred Fierro et Jean-Yves Sarazin, Le Paris des Lumières : D'après le plan de Turgot (1734-1739), RMN, 2005（『啓蒙期のパリ』）、Françoise Besse et Jérôme Godeau, Tableaux parisiens : Du Moyen Âge à nos jours, six siècles de peinture en capitale, Parigramme, 2005（『タブロー・パリジャン』）。

く景観図（図版1）に見られるように橋の上の家屋が取り壊されることになった。

古代ローマの廃墟を多く描いた「廃墟のロベール」が、革命前夜のパリで現在進行形の廃墟をルポルタージュするというテーマも興味深いが、二つの図版を見比べて気づかされるのは、橋を渡って正面右側の建物がほぼそのままの形で残されていることである。とりわけその左端に位置する塔はコンシエルジュリーの時計の塔であり、中世においては王の居室として使われていた（図版3）。その後、コンシエルジュリーは牢獄となり、フランス革命中にマリー・アントワネットが囚われた場所としてとりわけ有名となるが、中世から現在まで、幾度もの火災と再建を経て現在までその形をとどめていることは意義深い。

また、橋の上の家屋の取り壊しは、近代都市形成のメルクマール（指標）として重要であるが（偉大な例外としては、今なお宝飾店が立ち並ぶフィレンツェのヴェッキオ橋がある）、その理由としては、火事の危険や通行の妨げになったことがしばしば挙げられる。しかし、18世紀後半のパリを鮮やかにスケッチしたメルシエの『タブロー・ド・パリ』では、むしろ新鮮な空気の流れを妨げることが問題にされている。「橋の上に建てられた家々は、[……] 空気の流れが、町を端から端まで吹き抜けるのをさまたげ、また川岸までやってきた街路の腐った空気が、セヌ川の蒸気とともに運び去られるのをさまたげている」³。図版4を見ると気づかされるように、橋は5階建ての高層の建物で覆われており、そこから図版1に見られる瓦礫の山の大きさにも納得がいくだろう。高層の家屋によって囲い込まれたミアスム（瘴気）は、パリで生活する人々の衛生状態を悪化させていたのであり、その抜本的な改善策が講じられるのは、19世紀中盤のオスマン改造を待たなければいけない。

映画化もされたパトリック・ジュースキントの小説『香水』は、このような悪臭ぶんぶんたる18世紀のパリを舞台とした作品だが、天才的な嗅覚をもつ主人公が弟子入りをする調香師は、この両替橋に店を構える男であったことも言い添えておきたい。そして、主人公が店を去っ

3 メルシエ『18世紀パリ生活誌（上）』原宏編訳、岩波文庫、1989年、126頁。



図版3 「時計の塔」の名の由来となった、フランス初の掛け時計（筆者撮影）



図版4 ニコラ＝ジャン＝バティスト・ラグネ《ノートルダム橋と両替橋の間で行われた船乗りたちの水上槍試合》（1756）（カルナヴァレ美術館）

たまさしくその日の晩、シャンジュ橋の西方、第三と第四の橋桁が崩れ、香水店は消失、国王の命令でパリ中の橋から建物を撤去するきっかけとなったという、歴史を踏まえたエピソードも⁴。一枚の絵画から出てくる往時の都市環境は、現代のパリのそれと断絶を持ちながら、コンシエルジュリーという残存する建物から、さらには香水文化という観点から現代と交錯するものである。今回の研究調査で得られたこうした視点を生かしつつ、今後も絵画に描かれている同時代の風俗について、感覚や民衆的なものといった、文字に表しがたいものをおろそかにせずに分析を進めていきたいと考えている。

4 パトリック・ジュースキント『香水—ある人殺しの物語』池内紀訳、文藝春秋、1988年（文春文庫、2003年）。

研究調査報告

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究

琉球を五感で調べる

富澤 達三
(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

2013年3月28～31日まで、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究（以下、「奄美・沖縄絵引研究班」）の調査として、得能壽美氏（法政大学沖縄文化研究所）・本村育恵氏（青山学院大学大学院）とともに、沖縄県那覇市周辺を訪れた。琉球地域をフィールドとし、沖縄本島にも明るい得能・本村の両氏と異なり、私にとって初の沖縄本島訪問である。

1. 近世の画像資料

近世社会は文書^{もんじょ}だけでなく、膨大な画像資料をも残した。江戸時代は狩野派に代表される、武士身分を持つ大名お抱えの絵師たちが、絵描きの頂点であった。彼らは伝統的な花鳥風月を描き、ときに余技として市井の風俗や町の賑わいを描くこともあった。18世紀後半になると、江戸では庶民の人気に支えられた浮世絵師が登場する。最高の浮世絵師は、90歳の生涯で膨大な作品を描き続けた葛飾北斎であろう。文人たちも嗜みとして、多くの絵を残した。教養人は花鳥風月のほか、余技で各地の風俗や自然災害のようす・大事件を描き、それらは歴史資料として活用されている。例えば菅江真澄は文字と画像で各地の風俗を記録した。村や町の好事家で絵心のある者は、噴火や大地震などの災害・一揆・異国船情報などの大事件を、素朴な、時には緻密な絵で記録している。幕末になって、対象を即物的に写し撮ってしまう写真が登場すると、人々の視覚は大きく変化するが、それでも事物を描いて記録することは続けられた。人間の目と頭脳を通して観察され、描かれた事物は、何を省略し何を強調しているのか。「絵」や「図」を読み解き、過去を探る資料とする作業は、着実に進んでいる。

2. 調査の概要

那覇調査は3月28日午後から始まった。今回の調査

では、「奄美・沖縄絵引研究班」が読み解きを進めている「琉球交易港図」（浦添市美術館蔵）の実見が大きな目的である。まず同図で描かれた那覇港の現在を概観するため、港を一望できるガジャンピラ公園（那覇市小祿）より景観を調査した。那覇港は改修が進み、江戸期の姿からは激変している。得能氏によると、かつては現在公園のある高台から港まで抜ける坂道があったが、今は森に覆われてしまったという。

その後、波上神社・外国人墓地を巡検。沖縄県立博物館・美術館では、「琉球交易港図」と構図や描写が似る「首里那覇港図」をはじめとする那覇港を描いた屏風絵、進貢船の縮小模型を見学した。

3月29日は、沖縄県立図書館、沖縄県公文書館で調査ののち、浦添市美術館へ。同館所蔵の「琉球交易港図」と葛飾北斎の「琉球八景」の熟覧が大きな目的である。

①「琉球交易港図」

「琉球交易港図」（図1）は六曲一隻（縦120cm×横290cm）の屏風である。那覇港から首里城までを俯瞰し、交易に訪れたさまざまな船・那覇港の賑わい・港周辺の人々の暮らしが細部にわたって描かれている。この屏風は、明治19年（1886）ころ鹿児島県から赴任してきた巡査・高良八十八が土産として持ち帰ったものである。のち絵の部分だけが剥がされ、昭和62年に浦添市美術館準備室に寄贈され、修復により再び屏風となった。

博物館展示図録や書籍で見たかぎり「人物が小さく描かれ、略画風である」との先入観があったが、実物を見ると細部まで丁寧に描かれていることがわかった。

「琉球交易港図」と似た作品に、前出「首里那覇港図」（沖縄県立博物館・美術館蔵）・「琉球貿易図屏風」（滋賀大学経済学部附属史料館蔵）がある。滋賀大の作品とは、構図や細部の描写が大変似ており、中国製と推定される竹紙が使用されていることから、同じ工房で制作された可能性が指摘されている。



図1 琉球交易港図

②「琉球八景」

葛飾北斎による浮世絵版画「琉球八景」（森屋治兵衛版、横大判）は、天保3年（1832）琉球使節の江戸上りを当て込み制作された、八枚揃の作品である。コンパクトにまとまったシリーズで、展示でも出品されることの多い人気作である。今回、全てを熟覧できる大変貴重な機会に恵まれた（図2）。

浦添市美術館では、「琉球八景」を地域を描いた資料として調査研究している。2012年には横浜在住の画家・岡信孝氏より八図すべての校合摺り（浮世絵版画制作の初期段階で、版下絵を彫刻して作った主線だけの摺絵）が寄贈され、新たなコレクションとして加わった。

北斎自身是那覇を訪れておらず、「琉球八景」は江戸幕府が天保2年に出した版本『琉球国志略』の挿図を参考に制作された。浦添市美術館では描かれた8箇所の景観と現況を比較した作業も行っており、今回の調査では「筍崖夕照」（波上宮。那覇市若狭）と「中島蕉園」（那覇市泉崎）を訪ねることができた。

③首里城調査

3月30日、午前は得能・本村両氏とともに沖縄県立芸術大学のシンポジウム「川平朝申とその時代」に参加。午後は私一人で首里城周辺の調査を行った。「琉球交易港図」のプリントアウトを片手に首里城周辺を歩き、景観・建造物などの調査を行った。

沖縄戦によって破壊された首里城は、戦後復元されたが、復元作業の概要は城内展示施設の映像で詳しく説明されている。城内と周囲を調査したが、各種の首里城絵図に描かれた琉球臨済宗の総本山・円覚寺、その総門前の円鑑池と浮島の弁天堂、浮島へと渡る天女橋を「琉球交易港図」と照合した。



図2 葛飾北斎画「琉球八景」全八図

おわりに

実録映画の傑作『仁義なき戦い』（東映、1973）の脚本を手がけた笠原和夫氏（1927-2002）は、ジャンルを問わず、現実を題材とした作品の脚本執筆の際には、関係者への聞き取り・関連資料の徹底調査を行ったことで知られる。さらには舞台となる土地での調査（シナリオ・ハンティング）を必ず行い、絵空事ではない脚本を完成させた。舞台となる土地で調査を行うこだわりについて、笠原氏は以下のように述べる。

その土地の空気を吸うだけで書くものが違ってくるのだから仕方が無い。古い神社に寄って、石垣の裏に彫られた寄進者の名前をみるだけで、その土地の特徴ある名前がわかる。そんな細部を知ること、ふと何かが見えてくることもあるのだから。

『映画はやくざなり』（新潮社、2003）、125頁
笠原氏は、現地調査で体感する風土・食物・住民の気質・景観や町並みなどは重要な一次情報であり、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の五感を使い、自分自身のフィルターを通して内面に取り込み、創作や研究活動などの糧とすることの重要性を述べている。

地域史研究でも現地調査は重要である。私自身、琉球は未知の地域であった。今後も予定される琉球調査で、「五感」をフルに使って得るさまざまな情報を、「奄美・沖縄絵引研究班」の作業に活かしていきたい。

<参考文献>

謝敷真起子「琉球交易港図考」①～⑤『美術館ニュース きよらさ』No.18・19・23・25・26号、浦添市美術館、1998-2000
岩崎奈緒子『琉球貿易図屏風』の成立について—下貼文書の検討から—『研究紀要』第34号（滋賀大学経済学部附属史料館、2001）
『北斎の描いた琉球 琉球八景』（浦添市美術館、2010）

コラム 招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
黄 清 喜	北京師範大学文學院 民俗学与文化人類学研究所 文学博士研究生	2012 年 9 月 28 日～ 10 月 18 日
李 惠	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心 RA 博士課程	2012 年 10 月 9 日～ 10 月 29 日
霍 九 倉	華東師範大学 文芸民俗学専攻 博士課程	2012 年 11 月 18 日～ 12 月 1 日
Nicolette Lee	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科 修士課程	2012 年 12 月 3 日～ 12 月 22 日
Caroline Boissier	Universite Paris Diderot - Paris 7 CRCAO (パリ第 7 大学) 博士課程	2013 年 1 月 6 日～ 1 月 26 日
鄭 潔 西	浙江工商大学 東亜文化研究院 講師	2013 年 1 月 7 日～ 1 月 27 日
韓 男 洙	漢陽大学校 東アジア文化研究所 研究員	2013 年 1 月 9 日～ 1 月 29 日
Liliana Granja Pereira de Morais	サンパウロ大学大学院 日本文化専攻 修士課程	2013 年 1 月 21 日～ 2 月 10 日

幸福な交流の日々

黄 清 喜
(北京師範大学文學院)



中国江西省南豊県三溪郷石郵村の儺劇は、古風かつ質朴でありながら完全な形で、中国の国内外に大きな影響を及ぼした。そのため、多くの学者が海外から押し寄せ

てきた。私の乏しい知識によれば、石郵村の「儺」に興味を持ち、さらに儺劇の見学及び調査を行ったことがある海外の学者は、日本だけでなく、フランス、韓国、アメリカ、カナダ、ドイツなど数多くの国の学者も含まれる。中でも日本の学者が最も多く、特に、田仲一成氏・後藤淑氏・廣田律子氏・諏訪春雄氏・山口建治氏、星野紘氏、長瀬一男氏、村上昌人氏、有沢晶子氏などの学者が有名である。この度、私は先生方に教えを請うため、訪問研究員として日本を訪れた。訪問を通して、先生方と交流ができ、資料の閲覧と収集ができた。このようなことは私の視野を大きく広げてくれたほか、専門知識の基礎も固めることができた。今回の訪問は大変価値のあるものだったと確信している。



小熊誠先生との記念撮影



田仲一成館長・小熊誠先生との記念撮影



廣田律子先生による指導を受ける様子

石郵村の「追儺」は宗族で行われるものである。小熊先生（神奈川大学）の家族・宗族に関する専門知識は、私を大きく啓発してくれた。さらに、先生は宗族に関連する古典的著作をリストアップしてくださり、おかげで私は宗族社会に対して系統的理解を持つことができるようになった。また小熊先生は、私を連れて田仲一成東洋文庫理事も訪ねてくださった。田仲理事は、私が準備した石郵村の儺劇に関する 26 もの質問に対して、丁寧な回答をしてくださり、大いにご指導を頂いた。田仲理事は食事にもご招待してくださったほか、私に「清末清初的密密教」（大澤顕浩）という論文もコピーしてくださったりと、我々を大変歓迎してくださった。

また、私は、かねてより山口建治先生（神奈川大学）の言語民俗学と鐘馗の研究に対して憧れを持っていた。大変光栄なことに、2012 年の旧正月の際に、私は山口先生と一緒に石郵村で調査を行う機会を持つことができ、山口先生との出会いを果たすことができた。今回、再び山口先生にお会いすることができて、非常に嬉しかった。先生は私を鎌倉へ連れて行ってくださり、そこで私は鎌倉時代の民俗文化を体験することができた。

廣田先生（神奈川大学）の勧めもあり、私は星野先生（神奈川大学）も訪問することもできた。訪問してみて、私は星野先生の、比較の視点から振り付けを分析するという方法に惹かれた。さらに、長瀬氏（わらび座）の研究は廣田先生と共同でモーションキャプチャーを用いて石郵村の「儺」を研究することであることも知った。秋田県では、モーションキャプチャーで石郵村の「儺」の動きを分析し、それをパソコンで再現することが既にできているとのことだった。それを知って、私は今回の交流の目標を定めることになった。すなわち、モーションキャプチャーによる「儺」の再現を調査することである。そこで私は、廣田先生と一緒に秋田へ向かうこととなった。

私の視野を広げるために、廣田先生は岩手県北上市に

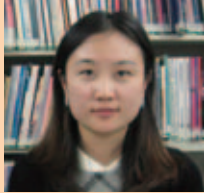


わらび座 長瀬一男主任と演者たち

ある「鬼の館」への訪問も手配してくださった。そこで、私は「たざわこ芸術村民族芸術研究所」を訪問することができ、劇団わらび座が公演した『遠野物語』を観賞し、秋田魁新聞社の村上氏（論説副委員長）に取材することもできた。また、「男鹿真山伝承館」にある「なまはげ館」では、見学だけでなく、当地の民俗を体験させてもらい、さらに男鹿半島沖の夕陽を観賞することもできた。3 日間だけの旅だったが、調査内容や形式は豊富かつ多様で、さらに風景も美しく、非常に楽しいものとなった。廣田先生と共に歓談しながら、美しい景色を観賞し、当地の美味しいものを味わい、和やかで幸せな時を過ごすことができた。廣田先生には、感謝してもしきれない。今回の旅を通して、石郵村の「儺」に関するモーションキャプチャーの制作を調査するという目的を達成することができた。さらに時間は短かったが、私は楽しく幸せに満ちた気分の中で交流を深めることができた。私は、私の研究に大変ご尽力いただいた先生方の深い親愛の情を感じながら、生涯にわたり役に立つ知識を得ることができたことに、心から感謝している。

清末民初における中国演劇の西洋への波及と日本との関係

李 惠
(中山大学)



清朝末から中華民国初頭にかけて、中国の演劇は主に次の二つの方法によって西洋へと伝えられた。一つは、舞台上で演じるという直接的な表現によるもの。もう一つは、テキストの輸出によるものであった。後者については、テキストが読み込まれ、再創造される中で、次第に西洋の読者たちが心に描く「中国演劇」が作り上げられていったといえる。興味深いのは、こうして中国演劇が西洋へ伝えられる過程において、日本の演劇界や演劇研究に携わる学界もそれを後押しする役割を果たしていたということである。

一. 梅蘭芳の訪米・訪ソ公演を促した日本公演

1929 年に出版された“Mei Lan-Fang, Foremost Actor of China”という本¹に、以下のような記述がある。

The Crown Prince and princess of Sweden: While visiting Japan, the crown prince of Sweden, Gustavus Adolphus, and the crown princess, Louise Alexandra, have heard so much of Mr. Mei's art that, on their arrival in Peking, they informed the legation that they desired to attend a performance by the Chinese actor... It was on an evening of October in 1926; The corridors of the Mei gardens...at 10 p.m. the two dramas The Jade Hairnet and The King's Parting with His Favorite.²

記録によれば、スウェーデンの皇太子および皇太子妃が日本を訪れた際に、梅蘭芳の演劇芸術に関する多くの情報を耳にしたのだという。これを聞いた二人は北京への旅路に就く際、公使館に対して中国演劇を観たいと願い出た。そして、1926 年 10 月ある晩の 10 時から、梅氏の自宅中庭に面した回廊において、「玉簪記」と「霸王別姫」の二つの演目が演じられることになったという。この本には、開演前にスウェーデン皇太子一行と梅蘭芳が共に写る写真までもが載せられている。

この文献の信頼度を考証した上で、ここに描かれた演目についての情報を分析してみると、次のようなことがいえるだろう。すなわち、スウェーデンの皇太子一行は日本で開かれた梅蘭芳の公演についてのきわめて傑出した評判を伝え聞いたために、中国を訪れた際に梅蘭芳の

演劇を観ることに決めた。このことは、偶然の出来事などではなかった。梅蘭芳や齊如山といった人々は、当時、中国演劇が西洋の舞台へともたらされ、そこで演じられてゆく過程において、「よき風の力を借り、空の彼方に昇りゆかまし」という関係性の一翼を担っていたためである。梅蘭芳が日本で公演したのは 1919 年と 1924 年のことであり、一度目は彼が 25 歳の折、そして二度目は 30 歳の折であった。この時、梅蘭芳はすでに絶世の風采と才華とを誇っていた。しかし、後に獲得する「四大女形」あるいは「梨園の大王」などといった名を欲しのままにするには至っておらず、当然、文化表象としての梅蘭芳という地位も確立されてはいなかった。梅蘭芳の日本公演は各界の称賛と肯定的意見を得ることになり、このことが彼に国際的な名声をもたらしことにつながったのである。公演の成功は芸術面における梅蘭芳の自信をよりいっそう強め、中国演劇を西洋で演出しようとする齊如山にも大きな確信を与えることになった。また、これを契機に日常的な演出や渉外活動の計画も開始され、彼らはさらなるエネルギーを蓄えていくことになったのである。

二. 辻聴花の『中国劇』が西洋の読者にもたらした影響

辻聴花 (1868-1931) は 1919 年に『中国劇』を著している。この本は 1920 年に初版が出版された後、1925 年までの間に第 5 版が印刷されるほどであった。これと時をほぼ同じくして刊行された“The Chinese Drama”には、以下のような記述が見える。

Historical development: The leading Japanese authority on our subject declares that the Chinese drama is three thousand years old.³

著者が中国演劇発展の歴史について紹介するくだりににおいて用いているのは、辻聴花の視点である。この中で著者は、中国演劇はすでに三千年の歴史を有しているのだと述べ、さらに辻聴花を指して彼こそが日本においてこの分野をリードする第一人者であると表現している。

中国演劇の歴史的研究が勢いを増していく中において、辻聴花の『中国劇』は「明らかに、『演劇史』とし

て当時でもまったく新しい性格を具えていた。それは自身の定める『演劇史』が含むべき範囲をすべて網羅していたのである。こうした範囲の設定は、それまでの中国における伝統的観念やテキストが抱える限界、そして当時の演劇評論家もっていた視野といったものを完全に脱することを可能にした。あるいは、この本こそが中国『演劇史』の枠組みを設定する上で、それまでとはまったく異なる新しい局面の始まりを見せてくれたといってもよい」⁴。従来、中国の研究者たちは古代、あるいは元雜劇や明・清時代の伝奇といったものにばかりに研究の重点を置き、依然として劇場で毎日のように演じられる花部や劇場の経営、そして役者たちの師弟間における伝授の方法や生活といったものにはほとんど注目してこなかった。そうした中であって、辻聴花は外国人研究者としての自らがもつ眼差しを中国演劇に向けようとしたのであり、当然の帰結として、そこには新たな機軸が生み出されることになった。彼の演劇史にとって、歴史と目の前にあるその時々状況というのは、どちらも関心を払わねばならない対象であった。また、この当時の中国研究者たちによる著作はいずれも文語と口語の入り混じった古めかしく難解な文章で書かれたものであり、そのことが西洋の読者たちを尻込みさせてしまう原因ともなっていた。こうしたことも手伝い、辻聴花の『中国劇』は、ごく平易な中国語であれば読むことができるという西洋の読者たちにとっても、真っ先に読むべき本となっ

たのである。

日本での公演は、梅蘭芳のアメリカやソ連における演出を直接的に促すことにつながった。ついに、西洋の観衆や劇作家たちに向けて、舞台の上で中国の舞台芸術を直に表現してみせる時がやってきたのである。『中国劇』をはじめとする辻聴花の膨大な量の演劇評論も、西洋の読者たちの目に留まるようになっていた。それは、中国演劇が西洋に伝えられてゆく過程において、また、こうした西洋の読者たちが中国演劇像を作り上げてゆく過程において、積極的な後押しをする役割を担うことになったのである。

註

- 1 作者は梁社乾 (Leung, George Kin, 1889- ?)。原籍地は広東新会、アメリカ合衆国生まれの梁は中国語と英語に精通していた。梅蘭芳のアメリカ公演に関する様々な文書作成にも関わっていた。
- 2 Leung, George Kin, “Mei Lan-Fang, Foremost Actor of China”, 英語版、上海:商務印書館、1929 年、p.56.
- 3 Johnston, Reginald Fleming, “The Chinese Drama”, Shanghai: Printed and published by Kelly and Walsh limited., p.13.
- 4 嗎書儀：《清末民初日本の中国戯曲愛好者》、《文学遺産》、2005 年第 5 期、p.114-129。

近代建築の文化的脈絡を探して

霍 九 倉
(華東師範大学)



建築と文化は密接な関係にあり、建物そのものが文化であるとも言えるが、それは資材、技術、形状、機能という観点からだけでなく、その形の内面に、人々の美意識や風俗的な習慣、考え方、精神的気質などの文化的要素も含んでいる。

建築文化といってまず最初に思い浮かべるのは伝統的建築物であろうが、同様に、現代建築物も豊かな文化を持っているものと思われる。上海と東京に焦点を当ててみよう。

上海にある東方明珠テレビタワーは 1994 年に建てられ、高さは 468 メートルであり、そのインスピレーショ

ンは、唐詩に由来するそうである。唐朝詩人、白居易による「琵琶行」という詩の中で、琵琶の音を真珠にたとえ、皿に落ちる美しい音色を詠んだ箇所である。タワーの設計者は幻想に富み、11 個の大小異なるサイズで、高さが入り乱れた球体が、青い空から地上の緑の芝生に真珠のように連なり、その中の、まばゆい 2 つの巨大な球体はルビーのように空に浮いているという、まさに「琵琶行」という詩の境地を表現した。

それが元々の設計者の意図であったが、一般の人々は、東方明珠テレビタワーはキラキラ輝く真珠のように、また、タワーの下に位置する曲がりくねった河は龍のよう

に見え、真珠と戯れる龍の図、「^{ロンシージュ}龍戯珠」のイメージを持つようになった。龍戯珠は中国の伝統的な、めでたいとされる図柄である。このような見方から、人々が、建物に対して、好感と高評価を持っていると言える。あるいは、^{タンフールー}糖葫芦（串刺しの菓子）のようだという見方もあるそうである。糖葫芦は、中国の特産品の1つであり、見た目も味もよいお菓子である。このような見方も「中国風」というイメージが現れている。

同じようにタワーを例にすると、東京スカイツリーは2012年に建てられ、高さは634mであり、今現在、世界一高いタワーである。東京スカイツリーの足元は三角形になっており、上にいくほど細くなり、円柱の形になる。タワーの構造は日本の国宝の1つである“五重塔”に似ていて、主に地震と強風を防ぎ止めることに効果的だそう。夜になると、トップと2つの展望台がライトアップされ、白い光で照らされると、まるで日本を象徴する富士山の山頂の積雪を思わせる。

東京スカイツリーの設計には、モデルとなったものが存在したのだろうか。大地に突き刺している日本刀であるという説もある。確かに日本は武士の伝統が長く、刀

はサムライ精神を最も体現しているとも言える。設計者が無意識に刀のイメージを取り入れたとしても理にかなっているのではないだろうか。実際、東京スカイツリーの外観も、刀のシルエットが確かにある。また、日本の伝統人形である“こけし”の形とも似ているような気がする。それは丸い頭と細い体の形をしており、長いスカート^{の形がスカイツリーのシルエットに似ているようにも見える。}

一方、上海博物館については、中国古来の天文学における宇宙構造論の理念を受けている。また遠くから見ると、中国伝統の青銅器のようでもある。

そして、江戸東京博物館については、現代的な鉄筋コンクリート構造だが、単に形だけから見ると、まるで弥生時代における高床式倉庫のようである。

このように、近代建築は、機能を重視するだけでなく、魂を持った独自のスタイルが求められる。このため、近代建築が、多かれ少なかれ伝統文化の中からそのインスピレーションを吸収し活かすことにより、その建築物を見た人々は、より多くの文化的要素を感じ取ることができるのではないだろうか。

近世日本の尼寺：「駆け込み寺」東慶寺と「比丘尼御所（びくにごしょ）」制度

Nicolette Lee
(ブリティッシュコロンビア大学)



2012年12月3日から22日まで、私は神奈川大学非文字資料研究センターに訪問研究員として在籍した。この研究機会を通じて修士論文の資料を見つけることができ、非常に有益な経験であった。

1. 研究テーマ

私の研究テーマは、近世日本の尼寺である。このテーマに関心を持つようになったのは、江戸時代に宗教を實踐していた主な女性たちについて研究を始めたときだった。私は「縁切り寺」の尼僧、皇女などが住持する尼寺「比丘尼御所」の尼僧、そして有名な「熊野比丘尼」について簡単に考察し、権力と尼僧たちの人脈との関連性が根底にあるテーマであることを確認した。私が特に注目したのは、女性同士の交流の重要性である。尼僧たちは皇女などの平信徒に手を差し伸べ、彼女らの尼寺を支援し、布教活動を行った。この研究を進めるなかで、私

は焦点を上流階級における尼寺制度である「駆け込み寺」と「比丘尼御所」の2つに絞り込んだ。これら2つの制度に焦点を絞る一方で、尼寺の制度的詳細に注目することで、尼寺の自律的地位について分析しようと試みた。そこからわかったのは、尼寺および尼僧への敬意や評判が、彼女たちの政治的・経済的権威を補完するある種の通貨のような役割を果たし、尼寺に幕府および朝廷と同等の権力と影響力を持つことを可能にしたということである。

2. 調査訪問の目的

調査訪問に先立って、駆け込み寺と縁切り寺に関しては、英語による研究資料を入手していた。特に鎌倉の東慶寺は、江戸時代に幕府から公認された2つの縁切り寺のうちの1つとして有名な寺なので、資料を見つけることができた。しかし比丘尼御所の制度については、注目

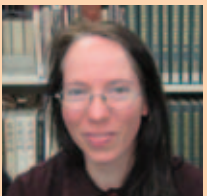
に値する資料がなかったため、尼寺には必ずしも関係のない仏教美術に焦点を置いた美術史的研究法による資料から推論を引き出すしかなかった。そこで調査訪問の主要な目的の1つには、比丘尼御所に関する日本語での研究資料を出来る限り集めること、そして縁切り寺と東慶寺についてより詳しい情報を集めることであった。調査訪問のもう1つの目的は、近世日本の仏教における女性について研究している教授と面会する機会を持ち、助言を求めることであった。

3. 調査訪問の成果

資料を集めることが調査訪問の主要な目的であったが、研究分野の教授と面会できたことが、結果的にはより大きな収穫となった。調査訪問の最初の週末、非常に幸運なことに、私は東慶寺で高木 ^{ただし} 侃 教授とお会いし、話を伺う機会を得た。高木教授は江戸時代の「離縁状」に関してこれまでに多くの論文を執筆されている。また法制史と併せて、幕府公認の2つの縁切り寺である鎌倉の東慶寺と群馬の満徳寺についても研究されている。高木教授からは、研究資料に関する助言を頂き、さらには

念願の日本コロムビア訪問

Caroline Boissier
(パリ第7大学)



こんにちは。フランスから来ましたカロリーヌ・ボアシエと申します。パリ第7大学の6年生です。私は日本の音楽産業について研究しています。博士論文は、日本コロムビアというレコード会社についてですが、フランスの図書館ではなかなかそれに関する書籍等を見つけることができません。今回、研究者として、非文字資料研究センターを訪問する機会に恵まれましたので、論文を書き上げる道筋が見えてきました。

日本コロムビアという会社は、日本では一番古いレコードレーベルになります。論文を書き上げるにあたって、私は、日本コロムビア社の歴史と、レコードのテクノロジー発展が重要なポイントだと思っていますが、テクノロジーに関する研究は難しいのではないかと思います。そこで、滞在の最後の研究発表に向けて、特にテクノロジーの発展について調査したいと思いました。

まず、神奈川大学に来る前に、私はフランスから、日

出版されているご自身の研究資料を頂いた。英語の研究資料だけで東慶寺について十分な研究を行ったつもりでいたならば、私は大きな間違いを犯すところだった。私はこの面会の機会が得られたこと、そして新たな資料を入手できたことを嬉しく思う。

次に、比丘尼御所制度の研究に関して、私は京都と神戸に小旅行をし、近世の比丘尼御所研究の分野で第一人者である方たちに会いに行った。京都では、尼寺大聖寺の支院である大歓喜寺の中にある中世日本研究所で、2人の研究者にお会いした。神戸では、ある大学教授にお会いした。教授は2つの比丘尼御所について掘り下げた研究を行い、比丘尼御所制度全般について、また2つの比丘尼御所のうちの1つの人的構造について、全般的背景知識を提供されている。

全体として、この学術交流は私にとって非常に素晴らしい機会となった。この交流は私の研究の方向性に大きな影響を与えるものであった。私はこれからも駆け込み寺と比丘尼御所の基礎構造について分析・詳述するというテーマを追究し続け、近世日本の仏教および女性に関する研究に貢献していきたい。

本コロムビア社に手紙を送りました。社史なども含む質問も書かせていただきましたが、うまく伝えられなかったかも知れません。

そこで、私は非文字資料研究センターに到着して、先生やチューターとお会いした際に、そのことも含め、私の研究について相談しました。先生方からは、いくつかアドバイスもいただき、日本コロムビア社に関する質問については、訪問前に少し修正していきましょうとご提案くださいました。

そして、ついに、日本コロムビア社を訪問する日がやってきました。日本コロムビア社の方々は、一生懸命私の質問に答えようとしてくださいました。私の質問が複雑だったため、多くの書籍の中から答えを探そうとしてくださいました。また、そこでは、最古の機械から最近の機械まで、様々な機械を見せてくださいました。スタジオで、レコードの録音風景も見学させていただいたので

すが、これは本当に面白かったです。

その後、滞在の終わりには研究発表を行う予定でしたので、その日に向けて、日本語でレポートの準備をしました。日本語の使い方について、チューターが色々とアドバイスをしてくださいました。チューターの専門は、イギリス文学史でしたので、日本の音楽産業について私に説明するのは、とても難しかったかも知れません。ですが、なんとか二人で協力しながら、発表に向けて準備をしました。研究発表は無事終わり、先生方からは、研究の良かった点や、アドバイス等をいただきました。

秀吉のお城を巡って

私は2013年1月7日から3週間、招聘研究員として神奈川大学非文字資料研究センターを訪問し、様々な資料収集と実地調査を行った。私の研究テーマは『『朝鮮日本図説』にみる豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争』である。

周知のように、秀吉の朝鮮侵略戦争（1592～1593）のような歴史事件に対しては、これまでの研究のほとんどは文献資料を中心に進められてきた。ところが、戦争に関する資料は、必ずしも文字により記録された文献資料とは限らない。図像などの非文字資料が文献資料と比べ量的には極めて希少でありながら、歴史を写実的に描いてより直感的に、より分かりやすく歴史を物語ってくれるのは、なかなか興味深いことだと思われる。

秀吉の朝鮮侵略戦争に関する図像資料は、日本と韓国には多数残されている。よく知られているのは、「釜山鎮・東萊府殉節図」（朝鮮国製作、韓国陸軍博物館所蔵）、「朝鮮軍陣図屏風」（日本国製作、鍋島報効会所蔵）、「朝鮮蔚山合戦之図」（日本国製作、前田育徳会尊経閣文庫所蔵）、「平壤城攻防図屏風」（朝鮮国製作、韓国国立中央博物館所蔵）、壬辰倭乱図屏風（朝鮮国製作、和歌山県立博物館所蔵）などの屏風図である。当時の中国人が製作した図像資料で、これまで紹介されたのは、「征倭紀功図巻」（個人所有、所蔵不明、写真有り）の一種しかないのである。

私の今回の研究対象は『朝鮮日本図説』という最近中国の国家図書館で発見した新資料である。当該図説には、1597～1598年の戦役期に朝鮮南部にある日本侵略軍

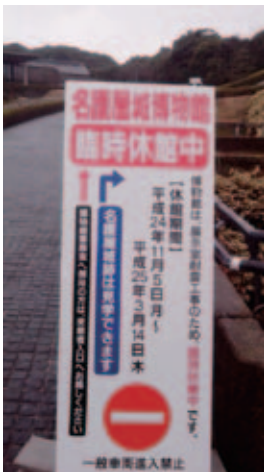
私は滞在期間中、日本コロムビア社の方々をはじめ、たくさんの人に会いました。非文字資料研究センターでも、同時期に来ていた韓国と中国からの訪問研究員の方々にもお会いしました。その方々の研究内容も興味深く、お話をするのは楽しかったです。滞在した寮の管理人の方や、その他、たくさんの方々にお世話になりました。最後に、この機会を与えてくださった非文字資料研究センターの皆様、先生方、チューター、お会いした皆様方に、感謝の気持ちを表したいと思います。

鄭 潔 西 (浙江工商大学東亜文化研究院)



の倭寨図（倭城図）が19箇所が描かれている。この図説は、上掲の屏風図と「征倭紀功図巻」のような絵巻と異なり、木版印刷による印刷書である。このような印刷書は、短時間に大量印刷が可能であるが、絵巻に比べその画像の画質は大幅に低減した。ところが、この図説は著者が戦争直後に自ら朝鮮南部の各倭城に入城し詳細に検視したことが明記され、実測によって作られた可能性が高く、その写実性は無視できない。また、『朝鮮日本図説』の刊行趣旨は明朝の海上の安全を確保するという点にあることから、終戦直後の当時、明朝に対して日本からの脅威はまだ続いていたことが分かる。この図説は朝鮮南部の倭城の全体性が強調され、対日本の軍事書として認識すべきだと思われる。

訪問期間中、私は神奈川大学校内の図書館や各図書室はもちろん、国立国会図書館、国立公文書館、東洋文庫、蓬左文庫などの図書館の資料を存分に利用でき、また、ほぼ同じ時期に建築された小田原城、名古屋城を巡って、実地調査を行った。そして、訪問研究期間が終わった後も日本に残り、秀吉の朝鮮侵略の前線基地として築かれた九州の名護



屋城にも赴いたのだが、名護屋城に着いたとたんに俄雨が降りだし、そして名護屋城博物館は耐震工事のために臨時休館となっており、案内してくれた友人と私以外、

誰もいなかった。ゆっくりと名護屋城跡を巡ろうと思っていた私は、その展開に、ある奇妙な思いを抱いた。

「日本を観る」から「日本を感じる」へ

韓 男洙
(漢陽大学校)



1月9日、私は初めて日本の横浜市神奈川大学にある非文字資料研究センターを訪れていた。その日の午後は、宿舎にスーツケースを置いてすぐにセンターの資料室へと向かった。資料で埋め尽くされたその部屋から醸し出される独特な香りと、収集された資料の保管方法は、そこを訪れる者に一種の目新しさと驚きを感じさせるものだった。私の中で、これこそ文字に非ざる資料を扱う研究センターの学術的な態度と性格とを示すものであるという感覚がひしひしと湧き上がってきた。これら資料室に納められた韓国や中国、そして日本に関する豊富な民俗資料を目の前にして、それまでの疲れも一気に吹き飛んでしまうほどだった。

私はこれまでに3度、日本を訪れたことがある。いずれも、調査を主目的としたものだったが、今回は初の一人での渡日となった。可能な限り多くのものを見てみたいという思いから、滞在スケジュールはタイトに組むことにした。そのため、日本でのフィールドワークを進めるうちに、自分の体力不足を痛感させられることになった。一方で、まったく馴染みのない土地へ行き、きわめて新鮮な事柄に触れることができたことで、毎回、疲れが一瞬で吹き飛んでしまうような心持ちになった。今回の滞在中、私は12カ所に及ぶ場所を訪れ、日本各地の民俗文化を体験することができた。ここに、その内訳を列举してみよう。電車に乗り、都会のど真ん中や市場まで出かけたり、村に暮らす日本人のもとを訪ねたりしたほか、博物館や画廊、オペラや伝統的な演劇を見学したり、公園や神社を訪れたりすることもあった。ほかには、大磯の左義長（以前は神社で行われていたとされる厄払いの儀礼）や三浦のチャッキラコ（幼い子供たちの踊り。子供たちは鈴と稲穂をつけた竹を手を持って舞う）を見学する機会にも恵まれ、さらには名古屋まで足を延ばして日本独楽博物館を訪問することもあった。これらの地で目にした様々な情景は、私の頭と心の中にしっかりと

刻み込まれている。だが、何よりも重要なのは、私の中で起こった「日本を観る」から「日本を感じる」という感覚の変化だった。日本に来て触れた忘れたい情景と雰囲気、自ずと日本を受け入れ、そこから何かを感じ取るという方向へと、日本に不慣れな一人の観光客だった私を導いてくれたのだろう。

國學院大学は、私が今回調査のために訪れた一つ目の場所だった。ここでは、江戸時代の神社がどのようなものであったのか、その形式を一目で理解することができた。とりわけ、樹木の葉の形をした祭祀儀礼用の杯はきわめて精巧かつ精緻に作られており、それは神社の祭祀儀礼が定められた類型と式次第、規模といったものに基づいて行われていることを伺わせるに足るものであった。また、祭祀儀礼に用いられる白い冊子は「浄化」を象徴するもののようで、別の機会に訪れたいいくつかの祭祀の中でもその意味を再確認することになった。

今回の調査で特に印象深かったものとして、天候と人々の姿を挙げることができるだろう。天候といえば、大磯で行われた左義長に触れぬわけにはいかない。1月14日は、大雪の降った日である。私は朝の10時には現地に到着したのだが、すでに強風とかなりの量の雪が降っていた。問題は、強い風のせいで足を一歩前に踏み出すのも困難なことだった。わずか200メートルばかりの短い距離を歩くのに、1時間余りの時間を費やしたような気がするほどだった。こうして、やっとの思いで海岸へと向かい、そこに設けられた9つのサイト（ワラでできた山。この中には旧年中に使っていた神棚のかざりやだるまが詰め込まれている）を目にすることができたのだ。砂浜を一步一步進むうち、しばらくすると例えような不気味な恐怖感が私を襲い始めた。今までにこのような天候の中でフィールドワークをしたことなどあるはずもなく、緊張から全身が強張っていくのがわかった。しかし、そこで前に進むのをやめたら、ぬかるんだ

砂に足を取られて起き上がれなくなってしまうだろうと思い、迫りくる風に耐えながらどうにか写真を撮り終えた。サイトの火入れは夜の7時から…。それまで8時間以上をどこか別の場所で潰さねばならなかった。びしょ濡れの服と靴に体は冷え切り、凍えて氷像にでもなってしまうそうだった。私は喫茶店と食堂を探し、そこで濡れた服を乾かして冷えた体を温め、サイトの火入れが始まるのを待つことにした。大雪で電車が運行しているかどうかもわからなかった。それ以上に不安だったのは、サイトに火を入れ、その火で団子を焼く人々の姿を見ることができるかどうかまったく予想がつかないことだった。しかし、時間通り7時になると、サイトの火入れが始まった。それまでの不安と凍てつく寒さが、一瞬のうちに煙の中へと消えて行くようだった。サイトを燃やす左義長に続いて、綱引きや海中での遊泳、厄払いの儀礼が行われ、歌も捧げられた。海岸では多くの人が団子を火に翳して焼き、それを分け合って食べていた。皆、顔に微笑みを浮かべながら、長い長い一日を終えたのだった。こうした時間の中で垣間見ることのできた人々の強い愛情や友情、そして故郷に対する思いといったものは、私の心にも深く刻み込まれることになった。この左義長とは、新たな年を迎えるために行われるもので、人々はあるとあらゆる怖れと不吉なものを炎の中に込めて燃やし、新年の到来を待つのである。

日本で二番目に訪れたのは、名古屋にある日本独楽博物館だった。新幹線での移動となったが、そのスピードに圧倒された。窓からは、富士山を眺めることもできた。名古屋港近くにある建物の2階が、私立博物館となっていた。私たちがそこを訪れた時、館長は真剣な面持ちで子供たちに様々な遊びの方法を教えている最中で、大きな声を張り上げながら説明をしているところだった。

博物館の中には、風や独楽、空中独楽など10万点近くの収蔵品が所狭しと並べられていた。そこには、中国や台湾、ヨーロッパ、オーストラリアの空中独楽などが揃えられており、「輪鼓」と呼ばれる日本の空中独楽までもが展示されていた。午後の1時半になって手が空くと、館長は昼食を摂りながら私たちに自らがこれまでに歩んできた半生について語ってくださった。

午後3時になると、館長は再び子供たちに遊びを披露して見せるために食堂を後にした。話を伺うことのできた時間は短かったのだが、館長の語りからは、子供たちに対する彼の愛情と信頼とが伝わってきた。彼は、子供たちに健康で自信に満ちあふれた生活を送ってほしいと願っているという。彼によれば、遊びとは失敗を繰り返し、失敗を通して自信を取り戻すという過程にほかならない。これこそが、遊びのもつ力なのである。

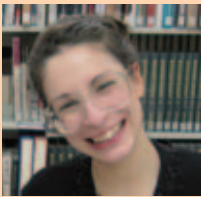
こうした館長の眼差しからは、文明によって失われてしまった子供たちの想像力と、幼い心から生まれる意志や信念といったものを守り続けていきたいという彼の想いを読み取ることができる。この想いのために、彼は博物館という小さな空間の中で近所の子供たちと遊びに興じるのだ。彼が子供たちと遊ぶ様子を見ながら、私の心にも幼い頃の思い出が蘇り、悲しみにも似た気持ちが湧き上がってくるようだった。70歳と高齢の館長が自ら遊びを企画し、顔をほころばせながら子供たちと遊ぶ様子には、本当に頭が下がる思いだった。

今回の訪問期間は決して長いものではなかったが、私に多くのことを経験できるよう配慮してくださった非文字資料研究センターのスタッフと、指導を引き受けてくださった先生方に心より感謝を申し上げたい。次の機会に日本を訪れる際には、外国からの「お客様」などではなくなっていきたいと願いながら。

国人陶芸家たちのライフストーリーに関心を持った。また、日本のスタイル、技術、さらには日本人のものづくりに対する精神が、どのように彼らの陶芸作品に影響を及ぼしているかについても知れたかった。これらの目的を達成するため、ライフストーリーのエスノ社会学的手

日本で陶芸を学んでいる、または陶芸に従事している外国人

Liliana Granja Pereira de Moraes
(サンパウロ大学)



法 (Daniel Bertaux¹, 1997) に従った質的インタビューを実施し、スチュアート・ホールの文化表象理論 (Stuart Hall², 1997) を主な理論的背景として利用した。

私は日本で活動する外国人陶芸家20人を特定し、そのうちの9人とインタビューの日程を組むことができた。6人 (レジーナ後藤: ブラジル、アンドリュース・ゲムリッチ: 米国、マシュー・ソヴヤニ: 米国、ダグラス・ブラック: 米国) 以上4名は益子にて; ユアン・クレイグ: オーストラリア-水上町にて; スティーブ・トゥーテル: 英国-東京にて) とは直接会ってインタビューを行い、3人 (ヘスアルド・フェルナンデス: スペイン-益子在住; カリーナ・ハマグチ: ブラジル-高知在住; ムピンディ・キプデ: ウガンダ-東京在住) とはEメールでインタビューを行った。上記のように、直接会って行ったインタビュー6件のうち、4件は益子で行われた。またインタビューには至らなかった陶芸家もそのほとんどが益子または笠間に住んでいた。この2つの地域に陶芸家が集中しているのにはさまざまな理由があるが、その1つに、両地域が首都東京に近く、東京が日本で最大の陶磁器製品の購入市場であることが挙げられる。両地域は首都の近くにありながら、依然田舎と見なされている。そうした環境では陶芸家は制作に必要な原料を直接調達することができ、都市部では認められない大型の薪窯を作ることもできる。

笠間焼の生産は江戸時代に始まり、近隣の益子にも大きな影響を及ぼした。しかし1920年代に始まった民芸運動と人間国宝の濱田庄司が益子に工房を建てたことで益子焼の評価が高まった一方、笠間焼は衰退していった。1957年に茨城県がデザイナーと陶芸家の招致を開始し、地元の陶芸品生産を奨励するようになってようやく、笠間には日本の他地域や海外から陶芸家が集まり、活動の拠点を置くようになった。こうした経緯があるからこそ、笠間の陶芸の中心地は、あらゆる人々に開かれており、笠間焼のみならずあらゆるスタイルを受け入れているのである。益子にも同様のことが言える。濱田庄司が英国の陶芸家バーナード・リーチと強い結び付きを持ち、セントアイブスのリーチ工房との関わりが深かったことから、益子には外国人との交流が盛んに行われた歴史があり、日本および海外のさまざまな地域から陶芸家を惹き

つけている。

インタビューにあたっては自由回答式質問を16問用意した。そのうちの3問には、インタビュー어의回答に共通性が見られ、本研究に非常に重要な結果をもたらした。私はそれらの回答を分析し、日本の陶芸および文化に関して、外国人陶芸家の談話と活動の中に見られる共通点を特定した。以下の通りである。

- ・日本では陶芸が芸術として認められている。これは欧米では陶芸が単に工芸と見なされているのと対照的である。
- ・日本では、人々は陶磁器の機能と用途を非常に重視している。
- ・日本人は欧米人以上に手作りの製品に価値を置いている。
- ・日本の陶芸家は作品に地域の原料を使っている。
- ・日本では、食べ物、季節、陶磁器に密接な関わりがある。
- ・日本人は自然をより身近に感じている。それは陶磁器作りにも反映されており、自然は陶磁器作りの過程の一部となっている。
- ・日本には、単純性と不完全性に価値を置く美意識がある。
- ・日本では、陶芸を学ぶ過程は欧米よりも厳しく、長期間に及ぶ。
- ・日本人陶芸家は、制作の過程を結果と同等に重視する。
- ・インタビューした陶芸家のほとんどが、高温の薪窯と灰釉 (はいぐすり) の技法を使っている。
- ・彼らのほとんどが、自然を主要なインスピレーションの源としている。
- ・インタビューの大半が、陶芸についてほとんどのことを日本で学んだ。
- ・彼らのほとんどが日本人の配偶者を持っている。
- ・彼らの大半が1990年代初頭 (バブル経済の頃) に日本にやって来た。

この調査から私は、インタビューーから得られた共通の回答は、日本の伝統工芸および文化に関して、特に明治維新 (1868) 後に創り出された慣行化したディスコースの産物であるという予備的結論を導き出した。このディスコースは、明治時代以降および戦後、日本が自らを近代国家と認める必要から生み出されたもので、エリック・ホブズボームの言う「創られた伝統」 (Eric Hobsbawm³, 1983) の概念と日本人論を包括しており、日本の伝統工芸の表現に反映されている。しかしながら、この問題を発展させていくためにはさらに深い研究が必要であろう。

3 エリック・ホブズボーム イギリスの歴史家。Eric John Ernest Hobsbawm, The Invention of Tradition, co-edited with Terence Ranger, Cambridge University Press, 1983 (『創られた伝統』)

英語、中国語でいただいた招聘レポートは、事務局で日本語に翻訳させていただきました。

コラム 派遣研究員レポート

名前	派遣先	派遣期間
于 飛	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学研究所	2012 年 11 月 1 日～ 11 月 21 日
姚 琮	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2012 年 11 月 1 日～ 11 月 20 日
須崎 文代	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター	2012 年 10 月 19 日～ 11 月 7 日
王 新 艶	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心	2013 年 2 月 18 日～ 3 月 10 日
李 徳雨	サンパウロ大学 日本文化研究所	2013 年 2 月 17 日～ 3 月 9 日

北京の“非物質文化遺産” —“毛猴” (hairy monkey)

于 飛
(外国語学研究科中国言語文化専攻 博士後期課程)



一. 今回の現地研究のプロセス

2012 年 11 月 1 日から 3 週間にわたり非文字資料研究センターの派遣研究員として北京師範大学を訪問し、北京の民俗工芸の“毛猴”について調査した。まず北京師範大学の図書館で“毛猴”について様々な資料を調べ、その後首都博物館、西城区非物質文化遺産展示センター、東城区非物質文化遺産展示センター、天津民俗博物館、北京地壇民俗文化節（祭り）を訪問した。さらに、“毛猴蕭”の伝承者である蕭掌柜氏にインタビューをした。

二. 北京の“非物質文化遺産”—“毛猴” (hairy monkey) について

“毛猴”という北京の民俗芸術は北京出身の人さえよく知らない。この北京特有の民間芸術は、清朝の末期に産まれた。しかし、様々な原因により、次第に我々の視野から消えていった。現在では、この芸術を継承する人は非常に少ない。継承者の代表人物は 87 歳の高齢の曹儀簡さんである。

実際の“毛猴”は自然界の小さい猿であり、機敏で活発な動物である。芸術家はこの猿の形と人間の知恵を完璧に結合し、北京の風土と民俗を生き生きと展開している。

“北京毛猴”は“中国蟬蛻”とも呼ばれている。その学名は“昆塑”であり、虫を用いる彫塑の意を表す。

“毛猴”を作る原料はセミの抜け殻、木蓮の花芽、白芨（ラン科の多年草）とアケビの四種類の漢方薬である。（図 1 参照）ある文献によると、その作品の題材は五つある。一つは伝統的な題材であり、北京の風土などを表す。二つ目は歴史の題材であり、歴史上の戦争場面など

を表す。そして、三つ目は現代の題材であり、現在の日常生活などを表す。四つ目は風刺の題材であり、現実社会の問題点などを表す。五つ目は、歴史物語や演劇物語の題材である。（図 2 参照）

そこで、なぜ“毛猴”を作る原料は漢方薬であるのかという疑問が浮かぶ。この答えについて、次のような民間伝説がある。その伝説によると、清朝の末期に“南庆仁堂”という薬局があった。ある日、この小僧が店主にひどく叱責されたが、生計のため何も言わずじっと我慢した。深夜に彼が一人で生薬を整理としていたら、突然アイデアが思い浮かび、目の前の生薬を利用して、



図 1 “毛猴”を作る原料



図 2 “花果山”という作品



図 3 文玩核桃（賞玩クルミ）

店主の姿を作ろうと思い立った。そこで、木蓮の花芽を店主の体とし、更にセミの抜け殻の鼻部分を頭とし、セミの抜け殻の四肢をそれぞれ両手と両足とし、最後に白芨でくっつけた。このようにして、最初の“毛猴”は産まれた。

カナダ日系人の移民史 —第二次世界大戦まで

姚 琮
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



この度、2012 年度神奈川大学非文字資料研究センターの派遣研究員として、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科へ訪問し、2012 年 11 月 1 日から 20 日まで、「カナダ日系人の移民史—第二次世界大戦まで」というテーマで研究を行った。その間にブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科の許南麟教授とチューターのニコレット・リーさん、ホームステイの家族の方に大変お世話になり、この場を借りて感謝の気持ちを申し上げたい。

私は今回の研究テーマについて、主にブリティッシュ・コロンビア大学図書館とバンクーバー市立図書館に所蔵する資料を探し求めた。

(一) 初期のカナダ日系人

カナダは、三つの民族的要素を持ちながら建国された。第一は、北からアラスカを経て定住した先住民族の「カナダ・インディアン」である。第二は、東から大西洋を

三. 結びにかえて

今回、“毛猴”についての現地調査を通して、利益の少ない“非物質文化遺産”に対する保護の必要性を感じている。それは“毛猴”が大人気の“骨董”や“文玩核桃（賞玩クルミ）”（図 3 参照）などと比べて、価値が上がらないと見なされているからである。従って、現在“毛猴”に興味を持つ人は非常に少なく、この工芸ができる人も極めて少ない。今回訪問した首都博物館、西城区非物質文化遺産展示センター、東城区非物質文化遺産展示センター、天津民俗博物館および北京地壇民俗文化節（祭り）の五ヶ所では、“毛猴”の作品は他の展示品よりもはるかに少なかった。また、“毛猴蕭”の伝承者の蕭掌柜氏に「今“毛猴”の作り方を学びたい人は多いですか。」と質問したとき、「非常に少ない。うちの家族さえやる気がない。」との答えが返ってきた。この現状に基づき、“毛猴”のような利益の上がない“非物質文化遺産”を如何にして継承しつづけるのかという問題はとても深刻であると思う。このような課題が非文字資料研究の今後の研究テーマのひとつになることを望んでいる。



UBC キャンパス

民族集団が大西洋を渡り、それぞれ定住した。¹ その頃、太平洋側から中国人を主力としたアジア人が、海を渡ってカナダに移住し、日本人移民がカナダに上陸したのは1877年であった。

カナダの日本人移民の第一人者と言える人は永野という姓の人で、1853年11月、長崎県に生まれた。1877年3月、当時、太平洋航路をとる船が長崎に停泊しており、永野は船長に、船で働くことを条件に乗船させてほしいと志願し、許可された。

永野氏がカナダに上陸してから、およそ20年の間に、日本人移民数は出稼ぎに行く単身の男子集団を主として、続々と増えてきた。19世紀末から20世紀初頭は、日本人移民は男子が圧倒的に多かった。原因は極めて単純で、男たちは日本国内で仕事が見つからず、たとえ職を得たとしても、低賃金で家族を養うこともできないからであった。カナダに出稼ぎにきた日本人は、未婚の男性たちが多かったが、既婚・未婚を問わず男たちは単身でカナダを目指したのである。その男たちは、親に仕送りをし、妻子を飢えさせないために、数年間の予定で、ブリティッシュ・コロンビアに赴いたのである。

（二）中期のカナダ日系人

20世紀に入る頃から、カナダへの日本人移民は急速に増えていく。1907年に、東京移民会社は約1500人の日本人をカナダへ送った。そのほとんどは、バンクーバーに行くこととなった。カナダ日系移民について著書のある末永氏²によると、この時期の日本人移民は主にブリティッシュ・コロンビア州の3箇所に勤めていた。

¹ 吉田忠雄『カナダ日系人移民の軌跡』（人間の科学社 2003年）
² 末永國紀 著書：『日系カナダ移民の社会史—太平洋を渡った近江商人の末裔たち』（ミネルヴァ書房 2010年）など

それらは、カナダ太平洋鉄道会社、ブリティッシュ・コロンビア州内の石炭鉱山とウェリングトン石炭会社である。バンクーバーを中心として、ブリティッシュ・コロンビア州の日本人移民は、こうして徐々に増えてきた。

第二次世界大戦に入ると、カナダ日系人の生活が大きく変わる。アン・ゴーマー・スナハラ（Ann Gomer Sunahara）が書いた『The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During the Second World War』（Toronto, 1981）の中で、戦争中のカナダ日系人が遭った拘留、強制移動や監視付き生活を詳しく述べている。

戦時中のカナダ日系人の生活状況についての研究著作は、アン・ゴーマー・スナハラやケン・アダチ（Ken Adachi）『The Enemy that never was; A History of the Japanese Canadians』（Toronto, 1976）があり、詳しく非常時期のカナダに滞在する日系人の活動を述べている。また、日本語で公開されたものでは、新保満氏の『石をもて追わるるごとく—日系カナダ人社会史』（大陸時報社、トロント、1975年刊）、『カナダ日本人移民物語』（築地書館、1986年刊）が詳しい。さらに近年、日系人の間で、自分の体験記録をまとめたものが数多く公開されている。

1989年6月、オタワにあるカナダ政府は、カナダ全土に以前から住む日系人に、証書のような手紙を送った。それは、カナダの首相が公式にカナダ日系人に謝罪した公文書であった。たった一通の証書だが、カナダ日系人にとっては、特別な意義を持っている。戦時に屈辱を受けた日系人にとっては、何よりの慰めであったことだろう。

日欧における住宅用台所の近代化過程に関する研究

須崎 文代
 （工学研究科建築学専攻 博士後期課程）



近現代の家庭生活は、産業革命以降、グローバルに展開した近代化の影響を受けて大きく変容した。なかでも台所は、住宅内の他室に比べて、近代化過程のなかで最も機能が多様化し、設えも大きく変化してきたのである。こうした台所の近代化に関する先行研究は、主として現象的な観察の中での議論に限られており、変容の要因や

社会的影響関係などの動向については残念ながら殆ど明らかにされていない。そこで、私は住宅用台所の近代化過程を明らかにする研究に取り組んでいる。現在、戦前期の台所の近代化には、建築関係者に限らず家政学関係者が深く関係したことに注目し、家政書から読み取れる台所改良論を中心として、衛生論や能率論などの理論が

導入される過程を検討している。そこでは、各専門家が欧米に学んで持ち込んだモデルが素地となり、また1920年代以降に展開したモダニズムの影響を受けている。今回の調査は、こうした日本の台所の近代化過程に影響した事物について、フランスにおける非文字資料を含む台所関連資料の分析および視察を行うものである。

今回の派遣調査は2012年10月19日より同年11月7日にかけて、フランス国立高等研究院においてジョセフ・キブルツ教授の御指導のもとに調査研究を行った。調査方法は、①生活史・技術史・建築史を扱う関連博物館における展示内容の視察、②図書館における関連資料の収集、③建築家ル・コルビュジェ（Le Corbusier）の住宅作品における台所の視察、④関係専門家からの情報収集の4点を中心とした。

なかでも実見できる台所はすべて視察することを目指して、台所空間、台所設備およびそれらを中心とした水廻りや平面プランについて観察した。具体的にはル・コルビュジェの住宅作品のうち、見学可能なラロッシュ・ジャンヌレ邸（Villas La roche et Jeanneret, 1923-5）、サヴォア邸（Villa Savoye, 1931）、ル・コルビュジェのアパルトマン（L'appartement 24 N.C., 1931-4）、ロンシャン礼拝堂（Notre-Dame-du-Haut, 1950-55）を訪問した。また、コルビュジェ財団が発行する関係資料を入手することができ、見学不可能なものの資料的補足が可能となった。建築・文化財博物館では、彼の住宅作品のひとつである、ユニテ・ダビタシオン（Unite d'habitation, 1945-52）の実物大模型が展示され、台所空間を実見できた。台所近代化に大きな影響を及ぼしたとされるコル

ビュジェは、機械化や合理化を建築に適用するため、家事労働や住宅設備を建築のデザインに取り入れ、台所にもそうした考え方を適用していた。「台所は神殿とはいわないまでも、家の中で最も重要な場所のひとつだ。台所も居間も人が生活する場所であるから。」（*Complete works 1929-34, p.29*）というサヴォワ邸に関して残した言説からも、台所のデザインを重視していたことが分かる。前川國男、坂倉準三、吉阪隆正といった彼の弟子たちをはじめとする日本の建築界をリードした建築家たちに大きな影響を与えた人物であり、その意味でも、コルビュジェの台所デザインは、台所の近代化に直接的な影響力を持っていたと言えるであろう。

さらに、キブルツ教授よりエコール・デ・ボザール（Ecole des Beaux-Arts）のCatherine CLARISSE教授を御紹介いただいた。教授はフランスにおける台所史の研究者としては第一人者であり、台所の近代化における台所空間の規模や改良理論の適用と建築的解釈について、本研究と共通した視点でヨーロッパの台所の近代化を著されている。教授と面会でき、御助言いただけたことは、本研究にとって非常に有益なものとなった。

今回の海外派遣では、文献資料の収集、関連博物館の視察、および台所近代化に大きく影響した一人であるル・コルビュジェの住宅作品の台所の視察を通して、現地調査によってのみ可能な成果を得ることができた。今回の調査研究で得られた成果を生かし、ヨーロッパにおける台所近代化がわが国のそれにどのように影響を与えたのかという視点をもって、日本の台所近代史の研究に取り組む所存である。

出稼ぎ「農民工」の生活現状及び都市における民俗事象に対しての受容 —広州市、東莞市における「農民工」を事例に—

王 新 艶
 （歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）



2013年2月18日から3月10日まで、私は非文字資料研究センターの派遣研究員として中国・中山大学非物質文化遺産研究センターを訪問し、広州における「農民工」の現状の生活と心理について調査する機会を頂いた。指導教授の劉先生、非物質文化遺産研究センター長の康先生、及びチューターなどのお蔭で、現地調査と文献資料の収集もうまくいった。

広州市は珠江デルタにおける最大の都市として、30

年前から「農民工」の出稼ぎ先となっている。中国労働社会保障省の統計によると、2010年広州市の外来農民工の数は1710万人に達した。1989年の117万と比べ、20年間で14.6倍に増えた。同じく広東省に属する「世界工場」と呼ばれる東莞市も、2012年までに外来農民工数が当地人口数の3倍余となって、523.46万人となった都市である。したがって、今回の調査は広東省の広州市と東莞市を選んだ。



写真1 春節後広州に戻る農民工

地縁の関係で、広州市と東莞市の農民工たちの約 85% は南方人である。調査によると湖南省、湖北省、四川省、広西省が上位四省となっている。北方人もいるが、数は少ない。その中では河南省の人が一番多い。その 2 つの都市の「農民工」の概況を把握する上で、21 人の農民工に対して聴き取り調査を行った。南北間で風習が大分違うことから、今回は主に北方から来た農民工を調査対象とした。そうすることで、彼らの、都市における年中行事などの民俗事象に対する受容程度が比較的分かりやすくなると思ったからである。

北方から来た 21 人の出身地は主に河南省、東北地区、河北省、山東省であった。調査した 2 月中旬はちょうど春節が終わった後で、農民工たちは農村から出稼ぎ先に戻る時期であった（写真 1）。春節の風習において、“餃子を食べるかどうか”ということは南北間の一番の違いである。その問いについて、21 人の中で、回族¹ の 5 人を除き、14 人が春節の時、餃子を食べると回答した。即ち、87.5% の人が自分の故郷の風習を守っているというのが分かる。南方の風習に従っている 2 人のうち、自発的に食べないというものは 1 人しかいなかった。それは、伝統的な風習が持つ、人々への影響力の強さを証明できるものだろう。言い換えれば、農民工たちは、一年のうち、都市にいる時間が長いものの、人々の心に深く刻み込まれているのはやはり農村の伝統なのである。

上述のように、農村と都市、双方を行き来し生活している「農民工」は、自らの農村の民俗文化を心に刻んだまま、都市で生活する。また、逆に、都市の生活のなかで経験した文化を自らの農村に持ち帰る者もある。しかし、実際には村落の伝統的な風習に従うことが顕著である。

¹ 中国の少数民族の一つで、中国最大のムスリム（イスラム教徒）民族集団。



写真2 農民工博物館の内部

紙面の都合上、ここではその原因の概略についてのみ述べようと思う。一つの原因としては、彼らの故郷の伝統的な風習が持つ力が強いということが考えられる。もう一つは、地域において伝承されている風習で年中行事を行うということは、人々の心の中で、自分がその土地の人間であるという自己証明になるものと考えられる。どこのやり方でやるのかということが、自分がどこの人であるかという証明になるというのは、一般的な認識であろうと思う。長年、都市で働いている農民工たちは、「都市人」、あるいは「当地人」という意識がない。それは調査した際、筆者が強く感じた。

今回の調査で資料を調べているうちに「農民工」問題は今、中国で社会学、法律学、文学など様々な分野で注目されているということが分かってきた。それらの文献資料を参考にした上で、日本の出稼ぎ問題研究著作を対比し、中国の出稼ぎが特有な性格を持っていることも分かった。1980 年代ごろに『出稼ぎ労働と農村の生活』（渡辺栄・羽田新 1977 年）、『出稼ぎの総合的研究』（同 1987 年）などをはじめとする日本の出稼ぎについての沢山の研究がある。それによると、日本の出稼ぎというのは、ほぼ男性が単身で行っていた。一方、中国では、家族を伴う人が多い。従って、女性の家族における機能の変化はそれぞれで違う。この研究については、今後の課題だと思っている。

また、今回の調査で、中国における最初の「農民工博物館」（写真 2）を見学した。ここでは、広州市の農民工の歴史及び動向が把握できるようになっている。聞き取り調査で得た農民工たちのライフストーリーを整理し、民俗学の視点から農民工問題を考察するということも、今後の筆者の課題だと思っている。

サンパウロにおける韓人達の食文化研究

李 徳雨
（歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）



2. 韓人達の食文化

滞在は 3 週間と短く、50 余年間の韓人達の食生活を記録することは簡単なことではない。そして個々の空間と共同的な空間が共存する食生活を同時に記録し、分析するためにはある程度の基準を決めないと難しいため、筆者はすべての情報提供者に対し必ず行った質問があった。それは韓国の代表的な食べ物であるキムチ（白菜、唐辛子粉、塩）、白いご飯（米）、味噌（大豆）などの食べ物を基準に、移民初期にどのようにこれらの食べ物を食べたのか、そして今では、どのように食べているのかという質問であった。韓国人にとって、上記の 3 つの食べ物や食材は、他のものに比べて最も多く消費されているものである。筆者は、移民初期は、これらの食材や食べ物を手に入れることが難しく、量的な問題があったと推測してこのような質問をしたところ、意外な答えを聞いた。まずキムチの場合は、韓人より先に定着した日系人たちが白菜、大根などの野菜を流通させていたので、彼らのおかげでキムチを作ることはあまり難しくはなかったとのことである。これは、味噌、ご飯も同じであった。韓国より移民の歴史が 50 年ほど長い日系人が作って流通させていた味噌、醤油を入手することができ、日系人の農場から米や野菜などを買って食べることもできた。つまり、日系人のおかげで韓人たちは移民初期の食生活に余り困らなかったという話である。また、同じ東洋人という共感もあり、お互いに仲良くしていたという話も聞くことができた。

そして基本的に肉食を中心とするブラジルの食習慣は、韓人達の肉食回数を増加させることになった。韓人のブラジル移民初期当時の韓国では、肉を食べることは非日常の食事であったが、ブラジルに移民した後、低価格で食肉を入手することができ、肉を食べる機会も増えたという話は移民たちの共通の話であった。また、ブラジル料理と韓国料理の文化変容の中でも食べ物に困ったことは特になかったという。1960 年代の韓国では、端境期で食糧を簡単に手に入れることは難しかった時代であった。このような韓国から離れて、ブラジルに移民を決めた当初の韓人達は、豊かな食生活をする事ができ、

2013 年 2 月 17 日（日）から 3 月 9 日（土）まで、非文字資料研究センターの派遣研究員としてブラジルのサンパウロ大学日本文化研究所を訪問した。そしてサンパウロに住んでいる韓国人移民者たちの食生活全般についての調査、特に食べ物に関しての適応と変化という過程の中で、彼らの認識を中心に資料収集と聞き取り調査を行った。

1. サンパウロにおける韓人（韓国人移民者）

「移民」をする人々を日本語では移民者、日系人といい、韓国では移民者、僑胞^{キョボ}、同胞^{ドンボ}、韓人^{カンジン}と呼ぶ。また、韓人達が意見の交換や共同体を形成する環境などを韓国語では「韓人社会」と呼んでいる。ブラジル韓人移民の歴史は、今から 50 年前に始まった。公式な移民の歴史は大韓民国政府樹立以後の 1962 年から政策によってブラジルへの移民船が釜山から出発したことを想定している¹。1962 年 1 月に「文化使節団」という名称で移民してきた 15 人が彼らであり、そこから 2013 年を「ブラジル韓人移民 50 周年」と銘打った。現在、約 6 万人余りの韓人がブラジルに住んでおり、サンパウロでは 2 万 5 千人程度が住んでいる。筆者が訪問したサンパウロでは「ブラジル韓人移民 50 周年」の準備で慌ただしい雰囲気であった。



図1 韓人移民 50 周年記念式

¹ 実は植民地時代に日本の船に乗せられて来た何人かの韓国人がいたが、この人々は「日本国朝鮮」の書類を持参したということで、今の韓人社会では歴史として入れてないそうである。この点に関してはまたより深く検討する必要がある。



図2 お店の韓国料理

このおかげで彼らは生業に集中することができた。したがって、日本より 50 年以上遅れた移民の歴史にもかかわらず、最近、ブラジル国内の様々な産業に韓人達が多

く進出し、ボンヘチロにはコリアタウンが形成され、ファッションの中心街と呼ばれている。

そして韓国料理の店は、韓人達が集まることができる場所として、情報交換の場でもあり、集会の場所として使用されている。現在ボンヘチロには数十店舗の韓国料理専門店があり、100 店舗を超える韓人経営の衣服店がある。また筆者がボンヘチロに行った際、あちこちから韓国語が聞こえ、まるで韓国にいるような印象を受けた。

このように、ブラジルのサンパウロにおける韓人達の食生活に関する認識は、家庭食から外食まで様々な変化、適応の過程でみることができる。50 年以上が経つ韓国移民史から考えると、ブラジル韓国移民者達の研究は少ないと思われる。今回の調査を予備調査として、これからの研究をさらに進展させていきたいと考える。

海外提携機関との招聘・派遣事業について

本センターは、21 世紀 COE プログラムの後継組織として、海外の 9 つの研究機関と提携して、国際的な感覚を有する次世代の若手研究者の育成を目的とした研究者の招聘・派遣事業を進めている。21 世紀 COE プログラム以来の 10 年間で、訪問研究員は 49 人、派遣研究員は 25 人を数える。これら若手研究者の研究課題は、歴史、宗教儀礼、民俗祭祀、伝統芸能、民間演劇、陶芸、写真、レコード産業、無形文化財、風刺画、寺社おふだ、出稼ぎ労働、ジェンダー、住宅建築・都市建築、食文化など実に多様である。3 週間の短期滞在ではあるが、若手研究者の一義的な目的である資料・研究文献の収集においては派遣先各機関で蓄積された資料の多様性と奥深さが実感されており、また指導教授・大学院生との知見交流は研究員の新たな研究視点の開発に役立っていることが報告されている。本センターでは、指導教授による研究指導、チューターによる研究支援、滞在期間終了時の報告会をととして、このような招聘研究員の活動実態と研究成果の把握に努めてきた。一方、派遣研究員については、今回初めての試みとして、「2012 年度派遣研究員報告会」（2013 年 4 月 5 日（金））を企画し（写真）、派遣研究員である 4 人の院生から、提携機関における受入れ体制（人的・物的環境）、現地の実生活環境（交通、食事、宿舎）、

研究成果の自己評価、今後の派遣研究員へのアドバイスなどの諸点について報告をいただいた。センター側からは、田上繁センター長、鳥越輝昭・内田青蔵両研究員（国際交流担当）が参加し、活発な意見交換が行われた。元々多様な広がりを持つ非文字資料は、各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時間・空間における蓄積を背景としていることから、その研究方法としても比較歴史的視点を求めるものであるが、招聘・派遣制度は、そうした研究交流実践の一端を担っているといえる。派遣研究員の資格は、2012 年度より、5 つの大学院研究科博士後期課程の在籍者に拡大されており、多様な研究テーマをもった院生の応募が期待されている。（非文字資料研究センター事務局）



2012 年度派遣研究員報告会

ブックレット紹介

神奈川大学 21 世紀 COE 研究成果叢書（神奈川大学評論ブックレット）

『神奈川大学 21 世紀 COE 研究成果叢書』は、21 世紀 COE プログラム『人類文化研究のための非文字資料の体系化』の成果を研究担当者の単著として、わかりやすく簡明にまとめたものです。2013 年を以って、全 8 冊の刊行が完結しました。

神奈川大学評論ブックレット34 800円+税 2012年6月20日刊行

浜田弘明『博物館の新潮流と学芸員』



市民にとってより良い博物館活動とは何か―博物館の歴史をひもとく、近年の学芸員や博物館学に関する各種論議を紹介しつつ、21 世紀の博物館の課題と展望を提示する。

神奈川大学評論ブックレット36 800円+税 2013年4月10日刊行

青木俊也『あるく民俗・あるく展示』



日常、私たちが改めて意識することのない、「歩く」という行為を、実験展示「あるく―身体記憶―」という展覧会を通して、生活文化である民俗として捉えなおす。

〔既刊〕

神奈川大学評論ブックレット 30 菅江真澄が見たアイヌ文化 菊池勇夫 800 円+税 2010 年 11 月 30 日刊行
神奈川大学評論ブックレット 31 名所図会を手にして東海道 福田アジオ 1000 円+税 2011 年 3 月 31 日刊行
神奈川大学評論ブックレット 32 オーラル・ヒストリーの可能性―東京ゴミ戦争と美濃部都政 中村政則 800 円+税 2011 年 5 月 20 日刊行
神奈川大学評論ブックレット 33 メディア環境の近代化―災害写真を中心に― 北原糸子 1000 円+税 2012 年 3 月 31 日刊行

神奈川大学評論ブックレット35 1000円+税 2012年10月5日刊行

金 貞我『風俗画のなかの女たち―朝鮮時代の生活文化』



朝鮮時代（1392-1910）に描かれた複数の風俗画から発信される人々の姿や行為、特に女性の生活文化を読み取る。

神奈川大学評論ブックレット37 1000円+税 2013年3月28日刊行

中島三千男『海外神社跡地の景観変容―さまざまな現在』



海外神社は「大日本帝国」の崩壊とともに、その機能を停止したが、本書はその機能を停止した海外神社（跡地）が、現在、さまざまな景観を変容させて存在していることを明らかにした。

コラム

二つの都市で開かれた二つの展示会

韓 東洙（漢陽大学校建築学部東アジア建築歴史研究室 教授）

2012年10月、韓国の建築史に関する世間の耳目を集めた展示会が韓国のソウルと水原でそれぞれ開催された。これら二つの展示会は漢陽大学校建築学部の東アジア建築歴史研究室が主催したもので、建築史関連の展示会が少ない韓国の現実のなかで、学系は勿論、社会的にも多大な反響を呼び起こしたと言われる。

ソウルの展示会は漢陽大学校の博物館で開催された。展示の主題は‘韓国建築文化財の復元と創造の境界・警戒’である。会場は博物館の1階から4階にかけて構成され、2階には建築文化財を描いた金榮澤画伯の作品が展示されており、3階には、1970年代に復元された佛國寺の関連資料を中心に文化財としての建築物の復元過程をたどり、韓国における建築文化財の復元の意味を考える機会を提供している。この3階の会場には、佛國寺が復元したときに作成された、図面と文書、そして、東アジア建築歴史研究室が制作した1/10縮尺の模型を展示し、復元工事の現場と参加者たちの写真や、新たに竣工された佛國寺を訪れた国内外の貴賓たちの写真など、様々な視覚資料が展示されている。これらの展示物は、40年前の佛國寺の復元過程が生き生きと見える貴重な資料として韓国で初めて公開され、韓国の文化財の専門家たちにさらに注目されることとなった。また、4階には建築文化財の復元・修理・補修の作業を紹介するパネル資料とともに、工事に使われた道具を展示し、また、切手・葉書・貨幣・ミニチュア・小説・ポスターなどの建築文化財の関連商品と、修学旅行の写真やアルバムを展示した。そのほか、当博物館は、今回の展示企画に当たって、小学生を対象とした美術展を行い、建築文化財を描いたこどもたちの入選作品を会場の1階に展示した。それとともに、美術作家の作品も並べて展示され、建築文化財を描写した専門家の目線とこどもの目線を比較できる観覧も行った。

ソウルの展示会は、2012年10月15日から2013年2月23日までの約4ヶ月間開かれ、その間に‘関野貞とアジア調査’を主題とした、東京大学の藤井恵介教授の特別講演が行われ、また、こどもの建築体験教室、古



写真1 漢陽大学校博物館の3階に展示された佛國寺無説殿の模型と関連資料



写真2 漢陽大学校博物館の4階に展示された崇禮門の部材と文化財復元の関連資料

建築市民講座、佛國寺の現場踏査など、様々な行事も行われた。なお、この展示会の企画に当たって、韓国文化財庁の専門委員を歴任した、漢陽大学校建築学科出身の劉門龍氏が、彼自身が持っていた佛國寺の資料を東アジア建築歴史研究室に寄贈したことということもあり、文化財復元の関連資料を大切にすることの必要性を改めて考えることが出来たのである。

次に、水原の展示会は、世界文化遺産の一つである水原華城の城郭内に位置する水原華城博物館で開催された。この展示会は、‘日・韓・中の伝統木造建築と大木

匠の世界’という主題で、各国の関連資料をまとめ、東アジアの伝統木造建築における大工の建築世界を再び照らすものであった。特別企画展として行われた水原の展示会には、韓国の大木匠（宮殿や寺院、家屋を建てる職人）として無形文化財に指定された申鷹秀氏が参加され、紫禁城の大工である李永革氏、法隆寺の大工である小川三夫氏の両氏も中国と日本の大木匠としてそれぞれ招待された。5,000年に達した東アジア建築の歴史上に日・韓・中の大工たちが一堂に会する最初の企画となり、非常に意味深い行事であったとも言われている。

水原の展示会は、これらの3人の大工が建築技術を学んできた過程と道具の使い方を理解できる作品や著作物などを並べて展示しており、それとともに、景福宮の勤政殿の栱包（コンボ）、紫禁城の太和殿の栱包と亭子（チョンジャ）、法隆寺の金堂の模型らが展示された。会場の入口には、日本と韓国の大工たちが道具を使って木材を調える作業を紹介するビデオの上映室を設け、観覧者の理解を増進させた。また、光化門を復元した時に作られた柱の部材を実物大の模型で展示して、大工の技量を鑑賞できるようにした。また、韓国と中国の建築技術に関する古文書をはじめ、清代の中国における有名な大工の家門であった様式雷の関連資料を紹介しており、会場の最も奥側には、別途の展示スペースとして‘大工の部屋’を設け、各国の大工の様々な道具を陣列し、道具の実際の使い方を撮った映像とともに鑑賞できるようにした。

一方、展示会の開催とともに企画したもう一つの行事は特別講演会であった。この講演会の内容は、3人の大工らが独自の作業方法と建築技法をそれぞれ紹介することであったが、会場をぎっしり埋めた古建築の専門家たちは勿論、建築学科の学生たちにも非常に有益な時間になったと言われている。

今回の水原の展示会は、韓国の言論社から大きく注目されたこともあり、水原華城博物館の優秀企画展示会の一つとして選定された。さらに、社会各界の市民団体からの要請により、2013年2月11日に終了予定であった展示期間を4月末までに延ばすこととなった。なお、水原の展示会は、2014年には日本の神戸にある竹中大工道具館で、今回の展示内容をそのまま移して再び展示を行う予定になっている。

今までは、日・韓・中における古建築分野の交流は、学術的な側面にかたよって学者を中心に行われて来たが、今回の展示会を開催することで、実務をもとにした専門家たちが交流する機会を得ることが出来た。それは、



写真3 水原華城博物館の特別展に展示された光化門の柱と教仁寺の栱包の実物大の模型



写真4 水原華城博物館の特別展に展示された中国の大工李永革氏の関連資料と紫禁城の亭子の模型

東アジアにおける木造建築技術の発展を促すことができる、非常に意味のあることであったと考えられる。また、私は、今回の展示企画を経験しながら、建築歴史学者としての役割は学術的な研究に局限されることではないことを改めて悟ることが出来た。

なお、これらの展示会の紹介とともに、現在、水原華城の門楼を主題とした展示会が同博物館で行われていることも簡単に紹介したい。特別企画展として企画した今展示会は、水原華城の八達門の解体・補修の過程と、その過程から明らかになった伝統建築の形式と特徴を理解できる資料を展示したものであり、八達門の構築過程を具現した3Dグラフィックスの映像が非常に目立っていると言われている。また、翌年の展示開始をめぐしている‘日・韓・中の建築歴史通史書の比較’という主題の展示会の企画について、日本の学界の方々から貴重な助言を頂きたいと思う。(翻訳：金 容範)

ESAY 研究エッセイ

コラージュを通して見えてくる 現代美術の展望と野望

小松原 由理（非文字資料研究センター 研究員）

2011 年度から、鳥越輝昭主任研究員のもと、熊谷謙介先生とともに『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究班に参加させていただいています。また 2012 年度からは新たにステファン・ブッヘンベルグ先生が加わり、さらにアットホームな雰囲気となりました。まずはこのような貴重な研究機会をいただきましたことに、この場を借りて御礼申し上げます。

さて、私自身の研究テーマの変遷を簡単に紹介させていただくと、学部生時代は美術教育に興味があり、世紀転換期ドイツで、一般市民の視覚教育の必要性を説き、初めて市民によるアマチュアアートのために展示の場を設けたハンブルク美術館館長アルフレート・リヒトヴァルクについて調べ、卒業論文を書きました。しかし、彼の言う国家政策として上から押し付けられる啓発としての芸術には当然限界を感じました。その後、芸術という表現手段を本当の意味で市民が獲得するための戦いは、20 年代の「歴史的アヴァンギャルド」と呼ばれる前衛芸術運動において本格的に始動したことを知りました。

この「歴史的アヴァンギャルド」のなかでも、特に惹きつけられたのが、「ベルリン・ダダ」という集団の作品や思想でした。以後は、前衛芸術運動のなかでも最も過激であったと評されたこの運動について、修士論文に引き続き博士論文でも自らの研究テーマとし発展させ、2007 年に『〈フォトモンタージュ〉の可能性——ラウール・ハウスマンの作品展開にみるベルリン・ダダ——』としてまとめました。

この論文でテーゼとしたものを短くまとめますと、「ベルリン・ダダ」のラディカリズムの中心は、これまで言及されてきたような、過激な社会風刺や芸術破壊の哲学にあるのではなく、彼ら自身が生み出した手法であり、あらゆる価値を転換していくことを可能にする〈フォトモンタージュ〉という作品技法にこそあるということ、そしてこの技法は、「ベルリン・ダダ」に参加したアーティストが解散後に個々に発展させた「政治的モンタージュ」とは本質的に異なるということ、さらにその上で、唯一ラウール・ハウスマンのみが当初の〈フォトモンタージュ〉の原理に厳格に留まり続けた結果、絵画や写真、

文学やグラフィックという各芸術ジャンルを越境し続けることができたのだ、という結論で結びました。

このテーゼを支えたのは、〈フォトモンタージュ〉はそもそも「モンタージュ」なのではなく、「コラージュ」なのだというハウスマン自身の言葉でもありました。モンタージュとは、そもそも「組み立てる」という意の言葉で、何より映画の骨組み＝編集を指す技法として、時代の注目を浴びていました。一方コラージュとは単に「貼り合わせる」「並置させる」という技法です。両者は同一視されがちではあるものの、モンタージュにおいて断片は一つの統一的な価値へと向かい再構築されていくことを前提としている一方で、コラージュでは断片はむしろ統一的な価値の存在を個々の価値によって危うくし、さらには覆すという性格を帯びています。つまり、モンタージュではなくコラージュとハウスマンが語ったのは、いわば絶対的で主観的な世界を相対的で多元的な世界へと開いていくことが彼らの選択した作品制作技法だということを強調したわけです。

さらに、作品を生み出す彼ら自身の視線もまた相対化されています。実は、彼らの〈フォトモンタージュ〉がそもそも共同作品として誕生したという点は、こうした「作者の視線の相対化」を証明する興味深い史実でもあります。ジョージ・グロスの作品はジョン・ハートフィールドと共に、ハウスマンの作品はハンナ・ヘーヒと共に。また個人で制作した作品には、自分自身をキャンパスに登場させているのも、そうした着想によるものだと読めます。

こうして〈フォトモンタージュ〉が作者と作品の関係性を変化させ、ひいては作品概念も転換していったのと同様、新たな次元を切り開いたと言えるのが、作品におけるジェンダー表象です。例えば「ベルリン・ダダ」に参加した唯一の女性アーティストであるハンナ・ヘーヒの〈フォトモンタージュ〉では、ハウスマンやグロスたちもまた一つの「男性アーティスト」という価値の断片として部分化されています。彼女の代表作である《台所包丁で、ドイツの第一期ヴァイマル・ビール腹文化エポックを切る》は週刊ベルリングラフ誌からの切り抜きのみ

で完成されたコラージュ作品ですが、彼女が施した断片化の緻密さは多くの「ベルリン・ダダ」作品のなかでも頭抜けていました。著名人たちは性的レベルのみならず身体レベルでも徹底的に解体され、動植物との合体による非人間化が施されています。また女性たちが男装する一方で、ハウスマンやグロスといっ



図1 ハンナ・ヘーヒ《台所包丁で、ドイツの第一期ヴァイマル・ビール腹文化エポックを切る》(1919/1920 年) (ベルリン国立美術館所蔵)

た男性アーティストたちは女装、さらには乳幼児へと脱性化されていきます。ここまで断片化しつくした作者ハンナ・ヘーヒの彼女自身の立ち位置はというと、タイトルが示すように台所＝女性だけの私的な空間なわけです。

ところが、彼女自身は敗戦後のベルリンでアートを学び、ウルシュタイン出版社で編集の仕事にも携わるといいう、ヴァイマル共和国時代に世界同時多発的に脚光を浴びた、まさに典型的なモダンガールだったわけですから、この台所は他者によって纏わされた女性という集合体の位置価値の代弁に過ぎません。そうすると、ヘーヒがこの作品で打ち出しているのは二重の断片化だと読めるのです——一つは、異種混淆性により、父権的社会規範を根底から寸断することと、もう一つは、そうして粉碎化された現実自体が、台所という「女たちの場所」と同様一つの私的な空間にすぎないという意味での部分化、さらに言えば、そこで料理されるだけの素材に過ぎないという挑発的メッセージとすら読めるのです。この意味で、ヘーヒの〈フォトモンタージュ〉は、ハウスマンやグロスのコラージュとはまた異なるジェンダー的な視点において極めて戦略的な〈フォトモンタージュ〉だったとも言えるでしょう。

実は、ハンナ・ヘーヒの〈フォトモンタージュ〉が、その後の女性アーティストたちにも強く影響していることが最近あちこちで指摘され始めています。60 年代以降、アヴァンギャルドが再来したと言われる時代に注目されたアンナ・オッパーマンなどが制作した「アンサンプル・アート」はヘーヒの〈フォトモンタージュ〉がみせた異種混淆性が織りなす世界を実際に視覚化したような空間を制作する手法をとっており、なかでも《主婦であること》というタイトルの作品では、台所や食卓という主婦の占有空間を全宇宙と捉えていく手法において、ヘーヒと通底するものがあります。また、今やアメ

リカを代表する現代女性アーティストの一人でもあるマーサ・ロスラーのシリーズ作品《戦争を家庭へ持ち込むこと》では、台所と戦場のコラージュという明快な手法をとっており、しかも近代的なシステムキッチンとテレビを通してしか知覚できない戦場や兵士たちが、CG で如何様にも画像処理ができるこの時代に、あくまで貼り合わされた現実であるという痕跡としてのコラージュを彼女が選択した意図が反戦のメッセージとして見えてきます。さらに彼女の作品は、2012 年にベルリー



図2 アンナ・オッパーマン《主婦であること》(1968-1973 年) (ハンブルク美術館所蔵)



図3 マーサ・ロスラー《レッド・ストライプ・キッチン》(1967-1972 年) Catherine de Zegner (ed.): *Martha Rosler. Positions in the life world*. Belgium, Ikon Gallery, 1998, p.80.

ルーツとしてハンナ・ヘーヒの作品で展示が開始されていたことは言うまでもありません。ちなみに、『マニフェスト・コラージュ』のカatalog 冒頭には、「この（コラージュという）原理が、今なお、どれほどのアクチュアリティと潜在能力を持っていることか」¹ という企画側の意図が明記されており、この企画展のタイトル自体が、現代アートの核心としてコラージュを位置付けなおす宣言ともなっており、幸運にも、この企画展に直接訪問する機会が得られたこともあり、改めてこの手法を発明し時代表象を試みたベルリン・ダダリストたちの野望の大きさを実感させられました。

こうして作品＝行為と読み解く現代アートばかりを見つめていると、逆に『生活絵引』作成に必要な素材としての 18 世紀・19 世紀絵画の素朴ながらも忠実な再現性とその美しさの意味がまた鮮明に見えてきて、その新たな魅力に惹きつけられもします。ともあれ、あまり深読みせず、しかし丁寧な画像分析に取り組みたいと思う次第です。

1 Christine zu Salm (Hrsg.): *Manifesto Collage*: Nürnberg, 2012, S.13.

ウイスキーと文化

ステファン・ブッヘンベルゲル（非文字資料研究センター 研究員）

非文字の文物と言え、まず絵、彫刻、神器などが思い浮かぶ。これらは人間の手でつくられた事物であるが、単なる実用品以上の価値があり、人間文化の発展を象徴し記録している。

さらに日常の用を足すための服、家具、乗り物、住居なども人間文化の発展を記録する。これらの事物はみな、目的に資するのみならず、常に、文化が展開する過程の一部でもあるからである。人類の発展は、文章や絵画によって記録され、同時に、例えば農具の変遷などによってもそれを跡付けることができるのである。

非文字文物の展開によって人類の文明を描く、実に革新的な試みが、トム・スタンデーの *A History of the World in Six Glasses*（原著 2006 年、新井崇嗣訳『世界を変えた 6 つの飲み物』2007 年インターシフト社）である。この本で著者は、世界史を 6 つの飲み物を通じて描いている。ビール、葡萄酒、茶、コーヒー、蒸留酒、ソフトドリンクである。これらの飲み物はすべて、歴史のゆくえの決定に関与してきたことから、非文字文化の卓越した例でもある。とりわけ私の研究上の関心は蒸留酒のなかのひとつの飲料に向けられている。ウイスキーである。そしてその歴史、その文化的記憶の担い手としての役割、その非文字文物としての側面である。

研究上とりわけ魅力的なのが、アメリカ英語の“Whiskey”ではなくて“Whisky”、つまりウイスキーのなかでもスコットランド製のものである。その理由は、長い伝統を有するからである。「スコットランド人はケチである」という典型と並んで良く知られているスコットランド文化の特徴の一つである。

ウイスキー好きにとっては、ウイスキーはシングルモルトに限る。100 パーセント大麦の麦芽でつくった「命の水」だ。

ウイスキーは飲んで純粋に楽しいうえに、既述のように文化的記憶の一部でもある。ウイスキーは、スコットランドの高地や、ロマンティックに美化された密造の光

景、密輸入、冷酷な税吏、時にはスコットランドの国民的作家ロバート・バーンズさえ想起させるのである。特筆されるのは、滅んだ酒蔵のウイスキーが、失われた文化の代表となっていることである。

ウイスキーはとりわけ近年のブームのおかげでさまざまな文化活動の中心にもなっている。アイラ島のウイスキー・フェスティバル“Feis Ile”がその例である。毎年何千人もがスコットランド西部のこの小さな島を訪れ、酒蔵見学やウイスキー祭記念酒と、ウイスキーとは特に関係ない音楽、踊り、民謡を組み合わせたフェスティバルを楽しむのである。

ウイスキー自体のほか、瓶、グラス、樽、蒸留釜など、ウイスキーに関わるさまざまな文物が、歴史、とりわけスコットランドやヨーロッパの工業史を垣間見させてくれる。これを非常に自覚しているウイスキー産業も、おのれの歴史と伝統を強調する。ドイツの酒蔵“Whisky Agency”（ウイスキー・エージェンシー）の“Liquid Library”（リキッド・ライブラリー）というシリーズが一例である。シリーズの名称が、私の研究上の関心をかなりよく表している。液体の図書館が保存するのは、記録された文字ではなく、非文字の文物なのだ。

アイラの伝統ある酒蔵“Ardbeg”（アードベッグ）は、



図 1 Ardbeg（アードベッグ）社から限定発売されたウイスキー“GALILEO”

近代天文学の父、ガリレオにちなんで、“GALILEO”（ガリレオ）と名付けられたウイスキーを限定発売した。

これは、国際宇宙ステーション（ISS）が、無重力状態がウイスキーの分子にどのように影響するのかという実験を行うことを記念して発売されたものである。

スペイサイドの酒蔵“Glenfarclas”（グレンファークラス）は、1865 年以来家族経営であるが、“The Family-Casks”（家族樽）というシリーズでこの伝統を強調している。伝統は、古典的なラベルや、古典的な瓶の形からも見てとれる。

ウイスキーと文化との関連について私はすでに論文「ウイスキーと文化」（神奈川大学人文学研究所『人文学研究所報』48 号 35-47 頁）を公にした。引き続きこの研究を進めたい。



図 2 Glenfarclas（グレンファークラス）社の“The Family-Casks”（家族樽）シリーズ

渡辺美季先生が伊波普猷賞を受賞

本センター研究員の渡辺美季先生が、2013 年 2 月 12 日に、優れた沖縄研究に贈られる第 40 回伊波普猷賞（沖縄タイムス社）を受賞されました。受賞業績は、『近世琉球と中日関係』（吉川弘文館、2012 年）です。

渡辺先生は、新進気鋭の歴史研究者で、東洋史に軸足を置きつつ近世琉球を中心とした東アジア国際交流史の研究を続けてこられました。その論考をまとめて博士論文を作成し、さらにそれを基にして受賞著書が発刊されています。

従来の琉球・沖縄史の研究は、どうしても日本史の視点から研究が進められてきました。一つは、近代以降、沖縄は日本の一部であるという領域の問題が強い影響を与えていたと思われます。近世の琉球は、薩摩の侵略以来、日本の幕藩体制に深く組み込まれていきます。その点から、琉日関係を日本の対外政策の一環として研究したり、琉球社会を幕藩体制との関連で研究する立場が支配的でした。

他方、従来通りに中国とは冊封朝貢関係を維持し、近世琉球は中日両属の関係にありました。中国と琉球は、日本の鎖国時代にあっても密接な関係をもっ

ていました。中国史の立場からは、中国の外交政策の一部としての琉球としか対象にされませんでした。

渡辺先生は、琉球の資料を扱うだけでなく、中国の資料を丹念に調べることによって、新たなテーマを掘り起しただけでなく、明清と日本の間にあって、双方の支配秩序の違いの中でそれを調整しつつ存在した琉球を、「狭間」という独自の概念でその国際関係を把握しようとした点が、大きく評価されたのではないかと思います。（小熊）



書評

鳥越輝昭著

『表象のヴェネツィア——詩と美と悪魔』(春風社)

藤田 侑一郎(フリー編集者)

本書は、鳥越教授の『ヴェネツィアの光と影——ヨーロッパ意識史のこころみ』(1994年、大修館書店)、『ヴェネツィア詩文繚乱——文学者を魅了した都市』(2003年、三和書籍)に続く、ヴェネツィアを主題にした三番目の本。2012年年末に刊行された。全11章からなる。

序 章 カナレットと逃げ出す芸術家たち

第一章 バイロンと「ためいきの橋」の出現

第二章 『マリーノ・ファリエーロ』と『ヴェネツィア一夜』の貴族政批判

第三章 『夏の嵐』と『ヴェニスに死す』のなかの魔界

第四章 『ホフマン物語』——悪魔と鏡

第五章 レニエ『顔合わせ』と鏡の照応

第六章 L・P・ハートレー——異文化と罰

第七章 『旅情』のなかの異文化

第八章 ホイッスラーと裏町の詩情

第九章 〈死の町〉ヴェネツィア——「死の渦」と〈ゴンドラ=棺〉

第十章 ヴェネツィア表象史とディエーゴ・ヴァレリー
1797年、ナポレオン・ボナパルトの恫喝に屈してヴェネツィア共和国は消滅した。千百年の栄華がついえた。《あとに残ったのは、繁栄したこの町の記憶である。そのときから、ヴェネツィアは「詩」に変わった。…本書が取り扱うのは、もっぱら十九世紀以後の、語られてきた町、描き出されてきた町としてのヴェネツィアである。すなわち、表象の〈ヴェネツィア〉。》(まえがき)

目次が示すように、絵画、詩、オペラ、映画、小説などの世界で、ヴェネツィアが、どう見なされ、どんな背景を提供し、なぜ他の都市とは著しく異なるイメージの発信装置たりえたのか、著者の筆はすこぶるゆっくりした足取りで考察を進めていく。

前二著でも引用文が多かったが、本書も同様である。後註の冒頭に「以下、本書中の引用はすべて原文からの拙訳である」とある。引用文が、著者自身の文章に溶け込んでいるので、本文がぎざむリズムを妨げることがない。読者は、安んじて、静かな水面をすみやかに進む小舟のような文体に身をゆだねることができる。私も「心

地よい文章だ」と感じながら読み進めていた。

第五章に至って、フランスの詩人・小説家アンリ・ド・レニエのエッセイ集『ヴェネツィア暮らし』の、こういう文章に出会う。《ヴェネツィアでは、大きな心地よさに包み込まれるから、ひとは、すぐに、一種の静かな幸福感のなかで生きようになり、一種の友好的なくつろぎと、控えめな喜びと、やさしい感謝の気持ちとのなかで生きようになって、そこはかとない快楽を感じざるをえない。》(p.182)

集中の白眉は、第七章『旅情』のなかの異文化であろう。恋愛映画の古典、デヴィッド・リーン監督の『旅情』は、キャサリン・ヘプバーン扮する米国の中年女性が、積み立てたお金で待望の欧州旅行に行き、ヴェネツィアで、妻と別居中の商店主(ロッサノ・ブラッツィ)と恋に落ち、敗れて去る、という筋だった。アーサー・ロレンツの『カッコーの季節——喜劇』という作品が原作。異文化の相互理解は不可能だ、というテーマが原作にはより鮮明に出ているという。異文化とはなにか。米国人女性は「恋愛は結婚に直結すべきだ。結婚したら不倫は許されない。愛が冷めたら離婚すべきだ」という立場。商店主のほうは「結婚は恋愛が前提ではない。結婚中も、それぞれが別の相手と恋愛をしかまわさない。愛し合っていないことは離婚する理由にならない」というもの。「お腹がすいているときに、ラビオリを出されたら、ピフテキが食べたいなどと言わずに、ラビオリを食べるんです」という有名になったせりふが、そのことを端的に表現している。

《この世の最大の喜びはヴェネツィアを訪れることである。それに次ぐ喜びは、ヴェネツィアについて書いたものを読むことである》(前著まえがき)。四度目の喜びの時間はいつ与えてくださるだろうか。

装丁(毛利一枝)が、ためいきが出るほどすばらしい。



書評

吉川良和著

『北京における近代伝統演劇の曙光——非文字文化に魂を燃やした人々——』(創文社)

山口 建治(神奈川大学外国語学部 教授)

この書の何よりの功績は、書名にあるとおり、清末民初の北京の伝統演劇の状況を当時の新聞資料などを使って克明に描き出し、歴史上名もない役者が「民衆の教師」としての役割を担って、国民国家としての近代中国を切り拓くうえで、どれほど重要な仕事をしたかを、事実に基づき明らかにしたことである。田際雲・劉喜奎・鮮靈芝(以上梆子劇)・梅蘭芳(京劇)などの役者が成し遂げたことの意味が、おそらく初めて本格的に明らかにされた。

冒頭の「用語と史料」に「本書は少しでも史実に近づくよう心がけ、近年書かれているものは、資料的なもの以外、極力避けた」とある。現在の高みに立って賢しらに過去の出来事を論うような姿勢は一切見えない。新聞記事を多用するという本書の性格上、ややもすると叙述が間延びしそうなのだが、叙述は簡潔で引き締まっている。

おそらく著者の長年にわたる伝統芸能調査・鑑賞体験から得たものと思うが、新聞など文字資料から読み取る情報量が半端ではない。100年前の演劇研究である以上、新聞・書籍などの文字資料に頼るしかない。しかし、著者の意図するのは、あくまでも非文字文化としての演劇であり、わずかな文字資料から役者の演技、うたいぶり、せりふ、舞台装置、音楽、観客の反応などなどの、文字では表しにくい種々の情報をありありと読み解いた上での記述になっている。そういう著者ならではの能力があってこそ、名もない役者が中国近代を切り拓いたなどという、おそらく本国の中国人ですら考えつかなかったような大胆な説を、些かの外連味もなく主張できたのである。

第二四章は本書全体を要約したものであり、珠玉の言が多い。「娼妓・優妓たちが自分の儲けを度外視して、積極的に義務戯(慈善芝居)を催したのは、慈善を尽くし、公益に寄与すれば、被差別民から抜け出せ、世間から『一国民』として認められるという期待をもっていたからだ。・・・このように、晩清では、社会の最下層にいた娼妓がしつかりした理念のもとに社会貢献に参画し、演説をして、民衆、とりわけ無筆の多かった北京の女性たちや、一般民衆を覚醒・啓蒙しようとした。この

結果、・・・三大禁令が緩められて、近代伝統演劇への道が拓けた。・・・それは彼女たちが手を拱いていて授与された改革ではない。」

「このような絶望的な暗黒時代において、しかも被差別民として蔑まれた役者や優妓・坤角(女優のこと)のなかに、決して希望を捨てず、義務戯や警醒啓蒙新編戯で、最下層の『口語体に直してもわからない』民衆に、非文字文化の演劇をもって、近代の訪れを知らせ、近代の思想・知識を伝えようと奮闘努力した人物が中国にいたことは、今日の我々にも肅然として尊崇の気持ちを起こさせる。こうした不屈の意志をもって、非文字文化としての演劇が有する近代的な力を発揮し、民衆の教師たらんとした者がいた。」

跋語に、かつて本書の元になった論文二本をある先生に見せたら、「こんな研究は傍系の垂流だね」と切って捨てられた、とある。こうした批判に真正面から答えようとしたのが本書である。著者は自らの非文字文化の研究を中国学の支柱にまで高めないと、「決まり切った中国学者の立論や興味本位の伝聞を摘み食いして、片手間にいい加減な随想風な雑文を書き、安易な業績稼ぎに走りかねない」悪循環に陥ると危惧したとあるが、おおくの中国学者研究者にとり、耳の痛いことばであろう。

従来の中国学といえば、文言(日本語でいう漢文)で書かれた評価の定まった古典を、何か気の利いた理屈で再解釈するだけのものが多かった。著者の提唱する中国非文字文化研究とはそれとは真逆であり、これまでの研究ではほとんど無視され価値がないとされてきた、声と音で伝承された民衆の民間文化に光をあて、そこに今日につながる価値があることを、観念的ではなく事実をもって再認識させてくれた。そこにこれからの中国研究の新たな沃野が拓かれると、著者は力強く本書で訴えかけている。



No.20

2008年9月30日発行

ご挨拶

『非文字資料研究』の発刊を祝う
……………中島 三千男

非文字資料研究センターの発足とその
活動計画……………福田 アジオ

基幹共同研究

非文字資料研究ネットワーク形成に関する共同研究計画
……………金 貞我
地域統合情報発信の新段階……………橘川 俊忠

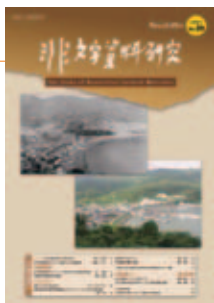
個別共同研究

『絵引』から Pictopedia へ……………ジョン・ボチャリ
関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに
資料収集……………北原 糸子
租界研究で目ざすこと……………大里 浩秋
対馬調査の課題と展望……………橘川 俊忠

神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター規程

研究エッセイ

非文字資料についてのあれこれ……………的場 昭弘
文化大革命の洗礼を受けた人と文化財の数奇な運命…津田 良樹



No.21

2009年3月10日発行

21 世紀 COE プログラム事後評価結果
お祝いと期待……………山火 正則
21 世紀 COE 最終評価を受けて……………池上 和夫

事後評価好成绩からの思い出
……………福田 アジオ

第 1 回公開研究会 報告

非文字資料としてのポスターの保存と活用

第 2 回公開研究会 報告

江戸学とビジュアルカルチャー ―異文化・美術・歴史―

研究エッセイ

取り間違えられた火山噴火図……………北原 糸子
史料としての写真絵葉書……………田中 傑
只見町の“知恵”を発信するために……………小松 大介
演説をいかに読み解くか？……………高野 宏康

INDEX



No.22

2009年7月25日発行

持続と変容の実態の研究―対馬 60 年を事例として 対馬調査報告

天道山登山の記……………橘川 俊忠
対馬の林産業に関する一次資料の調査
の必要性について……………本田 佳奈
対馬鰐浦集落にみる集落図・地籍図
……………津田 良樹

第二回対馬調査報告書……………磯貝 奈津子

非文字資料研究ネットワーク形成研究

ハイデルベルグ大学の学際的共同研究プログラムと大学院教育
……………金 貞我

第 3 回公開研究会 報告

震災復興と文化変容―関東大震災後の横浜・東京―

第 4 回公開研究会 報告

租界研究の新しい可能性を探る―上海シンポジウム―

コラム

《都名所図会》所引汉诗文之管窺……………沈 少康



No.23

2010年1月10日発行

第 1 回・第 3 回公開研究会 報告
震災復興期における都市の文化変容
―モダン文化の諸相と震災の記憶―

よみがえる都市景観
―震災復興期の「都市美」運動―

第 2 回公開研究会 報告

東亜地区租界生活之新議―仁川研討会―
～東アジア地区租界生活空間に関する仁川シンポジウム～

絵巻紹介

東都大震災過眼録（紙本淡彩・抄録）……………北原 糸子

研究エッセイ

変わる海、変わる生活……………橘川 俊忠
イノシシのおいしさばき方……………本田 佳奈
琉球国王尚宣威の墓とその子孫……………小熊 誠

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂共同研究
「四脚」？「背の白い黒牛」？？オリジナル版『絵引』におけ
る「間違い」とマルチ言語版の編纂……………君 康道



No.24

2010年7月25日発行

第 4 回公開研究会 報告
EBIKI―日本文化研究資料としての「絵引」―

研究エッセイ

「農漁民」は「半農半漁」を超えられるか……………安室 知
建築図面からみたわが国近代和風住宅
の設計手法について……………内田 青蔵

招聘レポート

日本に現存する中国宋元以降禅僧の頂相に関する調査報告
……………張 新 朋
都市生活中的中国传统戏剧……………潘 倩 菲
無形文化遺産分類にみられる差異―中国と日本の比較を中心に―
……………白 松 強

My First Research Trip to Japan……………Jeongeun Park
表紙写真資料解説

派遣レポート

中国広東省の水上居民を訪ねて……………藤川 美代子

海外提携機関紹介

ハイデルベルグ大学 COE (The Cluster of Excellence)
「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ：文化の流れ
に見る非対称性の変遷」



No.26

2011年7月25日発行

ごあいさつ……………田上 繁

研究班紹介

第 1 班 生活絵引編纂共同研究
…ジョン・ボチャリ、小熊 誠、鳥越輝昭
第 2 班 東アジアの租界とメディア空間
……………大里 浩秋
第 3 班 海外神社跡地から見た景観の持
続と変容……………津田 良樹
第 4 班 水辺の生活環境史……………安室 知
第 5 班 非文字資料の効率的な検索と安全な流通 ……木下 宏揚

研究エッセイ

わたくしの研究のことなど―自己紹介を兼ねて……………鳥越 輝昭
鹿児島県に残る「琉球」―僧侶の墓を中心に……………渡辺 美季
碑文なき記念碑が語るマレーシアの抗日の記憶をめぐる抗争
……………村井 寛志

招聘レポート

神社と日本民衆生活……………張 青 仁
二大演劇総合誌から見られる中国伝統演劇研究……………李 莉 薇
日中の石版画報に見る義和団事変―『風俗画報』と『図画日報』―
……………福田 忠之
敦煌卷子と日本奈良、平安抄本之比較……………姚 美 玲

派遣レポート

北京師範大学への派遣調査について……………張 仲 霏
上海における寺院や墓地の復興と死者供養……………曹 起虎

コラム

横浜・神奈川大学日本常民文化研究所付設非文字資料研究
センターに期待すること……………韓 東洙



No.25

2011年1月10日発行

2010 年度非文字資料研究センター
第 1 回 公開研究会 報告
関東大震災を描く―絵巻・漫画・子どもの絵―

2010 年度非文字資料研究センター
第 1 回 公開展示および公開ワークショップ
公開展示
『関東大震災を描く―絵巻・漫画・子どもの絵―』
公開ワークショップ
関東大震災の布絵づくり

2010 年度非文字資料研究センター 第 2 回 公開研究会 報告
中国・朝鮮における租界研究のいま

研究報告

海外神社研究会
「台湾に渡った日本の神々」……………金子 展也
中国・韓国の旧日本租界研究会
「日露戦争前後の朝鮮半島における灯台建設と日本」
……………谷川 竜一

研究エッセイ

三つのミュージアム
―“ムラ”の後退と只見町インターネット・エコミュージアムの意義―
……………佐野 賢治
“目と足を通して”理解した日本の文化……………韓 東洙
瀬戸内海歴史民俗調査と中島ミカン……………森 武磨

コラム

招聘レポート
若手研究員招聘事業の訪問研究―訪日の成果……………菊池 渡

海外提携機関紹介

東アジア文明研究センター（フランス）…シャルロット・フォン・ヴェアシュア



No.27

2012年1月10日発行

研究調査報告

水辺の生活環境史
北九州若松洞海湾における船上生活
者の歴史の変容……………田上 繁
海外神社跡地から見た景観の持続と変容
台湾の神社跡地調査からみた共同研
究の今後の展望……………津田 良樹

研究会報告

租界とメディア研究会
「中国の煙草とカレンダー広告が伝えるもの」……………孫 安石
海外神社研究会
「樺太の神社の終戦顛末」……………前田 孝和

研究エッセイ

マリアンヌと私……………熊谷 謙介
非文字文化研究対象としての中国伝統芸能……………吉川 良和
20 世紀中葉を生きた或る米国人 東アジア史家の軌跡
……………泉水 英計

書評

北原 糸子著『関東大震災の社会史』（朝日選書）…鈴木 淳



学術交流提携記念公開展示報告
モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町

2011 年度第 1 回公開研究会報告
京城の都市・建築そして生活

2011 年度第 2 回公開研究会報告
国際シンポジウム「都市新媒体与近代上海」(都市のニューメディアと近代上海)

研究調査報告
『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究
八重山蔵元絵師面稿……………得能壽美
海外神社跡地から見た景観の持続と変容
旧満州国国都新京(長春)の海外神社跡地調査…………津田良樹
水辺の生活環境史 汽水域の漁撈―涸沼のスマキー ……安室 知

研究エッセイ
ことばのひびき～言語処理の音韻的側面……………松澤和光

招聘レポート
外国だが身近に感じる国……………Bruno Hissatugu
日本初の風刺雑誌―横浜の「名物」……………Sonja Hotwagner
現代日本における寄席芸術の伝承に関する考察……………祝 鵬 程
日本のお守りの魅力……………Josef Antonius Kyburz
中国における日本映画の伝播と受容……………康 楽
崇鳳習俗の日中比較……………趙 李 娜
横浜の英字新聞は「台湾出兵」をどのように報道したか
―“Japan Punch”と“Japan Weekly Mail”を中心として― …… 轟 友 軍
近代前期に日本に渡った韓国女性の足跡を探して…………徐 智瑛

派遣レポート
帰国した華僑・留日学生が語った戦後初期における在日中国人留学生組織の結成―東京を中心に―……………田 遠 近
近・現代化に伴う中国杭州の食生活変化の断面……………李 徳雨
カナダの多元文化及び日系人の移民……………于 洋
戦後ドイツにおけるモンゴル学研究……………白 莉 莉

海外提携機関紹介
漢陽大学校東アジア文化研究所

ブックレット紹介

書評
琉球王国の自画像―近世沖縄思想史…………… 屋良健一郎

2012 年度第 1 回公開研究会報告
図像資料が語る近代中国のイメージ

研究会報告
『東アジアの租界とメディア空間』研究会
「第 5 回外国人居留地研究会全国大会
in 長崎 2012」……………内田青蔵
『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』研究会
「台湾神社の創建と祭典時の催し物の
変容」……………金子展也
『東アジアの租界とメディア空間』研究会
「台湾における居留地」……………栗原 純

研究エッセイ
漁師のリテラシー……………川島秀一

研究調査報告
水辺の生活環境史 消えたヨコハマ
―四万十川猟師がとらえた環境問題―……………安室 知
『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究
ポーリユーのジョーリ……………鳥越輝昭
海外神社跡地から見た景観の持続と変容
海外神社跡地調査(韓国)・麗水神社……………辻子 実
海外神社跡地から見た景観の持続と変容
台湾屏東県の原住民集落に建立された神社(祠)の現状
……………金子展也

東アジアの租界とメディア空間
旧台北城の近代建築の見学調査……………金 容範

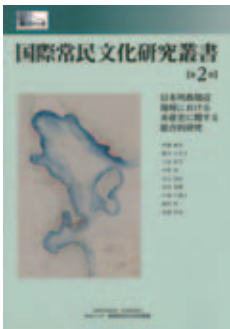
書評
川島秀一著『津波のまちに生きて』
(富山房インターナショナル)……………橘川俊忠
並木頼寿・大里浩秋・砂山幸雄編『近代中国・教科書と日本』
(研文出版)……………川尻文彦

国際常民文化研究機構 刊行物

神奈川大学国際常民文化研究機構より、国際常民文化研究叢書が 4 巻刊行されました。



国際常民文化研究叢書 第 1 巻
漁場利用の比較研究



国際常民文化研究叢書 第 2 巻
日本列島周辺海域における
水産史に関する統合的研究



国際常民文化研究叢書 第 3 巻
東アジアの民具・物質文化からみた
比較文化史



国際常民文化研究叢書 第 4 巻
第二次大戦中および占領期の
民族学・文化人類学

2013年度 センター研究員・研究協力者

センター研究員

名 前	所属部局	職 名	研究班
田上 繁 (センター長)	歴史民俗資料科学研究科	教授	1,4
大里 浩秋 (副センター長 / 運営委員<研究会担当>)	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	2
内田 青蔵 (副センター長 / 運営委員<国際交流担当>)	工学研究科建築学専攻	教授	2
小熊 誠 (事務局長 / 運営委員<事務総括・編集担当>)	歴史民俗資料科学研究科	教授	1B
熊谷 謙介 (運営委員<国際交流担当>)	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1C
川島 秀一	東北大学 災害科学国際研究所	教授	4
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	5
金 容範	非文字資料研究センター	客員研究員	2
小松原 由理	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1C
佐野 賢治	歴史民俗資料科学研究科	教授	5
泉水 英計	経営学部国際経営学科	准教授	3
孫 安石	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	2
津田 良樹	工学部建築学科	助教	3
鳥越 輝昭	外国語学研究科欧米言語文化専攻	教授	1C
中島 三千男	歴史民俗資料科学研究科	教授	3
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	准教授	5
ステファン・ブッヘンベルゲル	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1C
ジョン・ボチャラリー	歴史民俗資料科学研究科 明治大学文学部	非常勤講師 客員教授	1A
松澤 和光	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	5
宮田 純子	工学部電気電子情報工学科	特別助手	5
村井 寛志	外国語学研究科中国言語文化専攻	准教授	2
森 武麿	歴史民俗資料科学研究科	教授	4
安室 知	歴史民俗資料科学研究科	教授	4
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1A
渡辺 美季	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1B

研究協力者

稲宮 康人	写真家		3
金子 展也	(株) 日立ハイテクトレーディング		3
何 彬	首都大学東京教育学部	教授	1A
吉川 良和	外国語学部中国語学科	非常勤講師	2
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科	講師	1A
栗原 純	東京女子大学現代教養学部	教授	2
小松 大介	豊島区立郷土資料館		5
辻子 実	日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会	委員長	3
鈴木 一弘	高知大学自然科学学系理学部門	助教	5
徐 東千	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻	博士後期課程	1A
田名 真之	沖縄国際大学総合文化学部	教授	1B
常光 徹	国立歴史民俗博物館	教授	4
得能 壽美	法政大学沖縄文化研究所	特別研究員	1B
富井 正憲	漢陽大学校建築大学	教授	2
富澤 達三	外国語学部国際文化交流学科	非常勤講師	1B
豊見山 和行	琉球大学教育学部	教授	1B
中井 真木	東京大学大学院総合文化研究科	博士課程	1A
藤川 美代子	歴史民俗資料科学研究科	博士後期課程	4
真栄平 房昭	神戸女学院大学文学部	教授	1B



松田 睦彦	国立歴史民俗博物館	助教	4
本村 育恵	青山学院大学大学院文学研究史学専攻	博士後期課程	1B
山本 志乃	旅の文化研究所	主任研究員	4
李 利	元歴史民俗資料科学研究科		1A
若宮 幸一	旧古河鉱業若松ビル	館長	4
渡邊 奈津子	元歴史民俗資料科学研究科		3

研究班：1	生活絵引編纂共同研究	2	東アジアの租界とメディア空間
A	『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究	3	海外神社跡地から見た景観の持続と変容
B	『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究	4	水辺の生活環境史
C	『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究	5	非文字資料の効率的な検索と安全な流通

2013年度 個人研究課題一覧

田上 繁	非文字資料としての近世検地絵図の収集と解析
大里 浩秋	戦前台湾在住日本人関係資料整理
内田 青蔵	戦前期の横浜居留地に関する非文字資料の収集と分析
小熊 誠	東シナ海海域地域における非文字資料の比較研究
鳥越 輝昭	非文字資料に見る表象史
川島 秀一	漁民の備忘録に関する民俗学的研究
木下 宏揚	非文字資料の著作権管理に関する研究
金 容範	近代朝鮮の新軍事都市の形成と観光地化 - 鎮海市の事例を中心として
熊谷 謙介	フランス視覚資料における祝祭
小松原 由理	非文字資料としてのドイツ前衛芸術の分析
佐野 賢治	民俗資料の文化資源化
泉水 英計	戦後初期沖縄における米国軍政とその広報活動
孫 安石	中国都市史研究—とくに上海を中心に
津田 良樹	民家・集落の史的研究
能登 正人	非文字情報の収集と解析
ステファン・ブッヘンベルゲル	アメリカのコミックスとミステリーの文化と歴史
ジョン・ボチャラリ	絵巻と民間信仰
中島 三千男	海外神社
松澤 和光	非文字資料の検索法に関する研究
宮田 純子	非文字資料の効率的な検索法に関する研究
村井 寛志	戦後香港メディア史
森 武麿	オーラルヒストリーの可能性—戦後体験を語る—
安室 知	海浜微地形の認識と環境利用に関する研究
クリスチャン・ラットクリフ	中世における和歌の社会的価値と効用
渡辺 美季	琉球史に関わる非文字資料の収集と分析

2013年度 奨励研究者決定

研究課題	氏名（所属）
個人的技能と社会的制度からみた資源利用についての考察	新垣 夢乃（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）
唄おらしょ—長崎県生目島山田地域の音楽的事例研究	小泉 優莉菜（歴史民俗資料科学研究科博士前期課程）
ヤオ族儀礼神画の研究	譚 静（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）
民間信仰の様相—地蔵信仰を中心にして	近石 哲（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）
現代日本におけるスサノオ祭礼に関する民俗学的研究	姚 琮（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）

主な研究活動

運営委員会

2012 年度		
第 8 回	12 月 19 日	2012 年度訪問研究員の指導教員・日程変更・およびチューターについて、復興所得税導入に伴う謝金の扱いについて、戦意高揚紙芝居コレクションについて
第 9 回	1 月 23 日	2012 年度予算残額の扱いについて、2012 年度事業報告書・2013 年度事業計画書（案）について、2013 年度研究担当者人事について
第 10 回	2 月 27 日	2013 年度研究担当者人事について、2013 年度事業計画に基づく諸検討事項について
2013 年度		
第 1 回	4 月 24 日	2013 年度研究員人事について、2013 年度研究協力者の委嘱について、2013 年度運営委員の変更について、第二期研究班（『日本近世生活絵引』南島編）の名称変更について、2013 年度予算（配分）について、2013 年度海外提携機関との招聘・派遣募集要項について、2013 年度奨励研究募集要項について
第 2 回	5 月 22 日	2013 年度奨励研究審査について、2013 年度海外提携機関への派遣研究員について、2013 年度海外提携機関からの招聘研究員について

研究員会議

2012 年度		
第 3 回	2 月 13 日	2012 年度事業報告書（案）について、2013 年度事業計画書（案）について
第 4 回	3 月 21 日	2013 年度研究員人事について
2013 年度		
第 1 回	4 月 24 日	2013 年度研究員人事について、2013 年度予算配分について

研究会

研究 班

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』 編纂共同研究・研究会 9月21日、10月26日、11月9日、1月11日、5月8日、22日
『日本近世生活絵引』 南島編編纂共同研究・研究会 2月27日、3月4日、5日
『ヨーロッパ近代生活絵引』 編纂共同研究・研究会 2月1日
東アジアの租界とメディア空間・研究会 1月11日、5月24日
水辺の生活環境史・研究会 2月14日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究	3月14日～25日	フランス（パリ）他	熊谷謙介
『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究	3月28日～31日	沖縄	富澤達三・得能壽美
東アジアの租界とメディア空間	10月19日～21日	長崎	大里浩秋・内田青蔵・栗原純
東アジアの租界とメディア空間	1月31日～2月2日	韓国（ソウル）	内田青蔵・金容範
東アジアの租界とメディア空間	3月14日～17日	台湾（台北他）	内田青蔵・田上繁
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	2月20日～26日	中国（開封他）	津田良樹・橘川俊忠
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	3月7日～12日	台湾（台北他）	津田良樹・金子展也

編集後記

ニューズレター「非文字資料研究」は、30号を迎え、2003年から始めて足かけ11年にも及ぶ神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」とその後継組織である非文字資料研究センターの活動をお伝えし、記録してきました。総ページ数は、956ページにのびります。その軌跡は、COE拠点リーダーであり、その後センター長として非文字資料研究を牽引して来られた福田アジオ先生を中心に、COE共同研究員、COE研究支援者の教員や院生の方々、調査研究協力者、海外協定校の方々、そしてセンター研究員や研究協力者の方々など、じつに多くの研究者のご協力のもとに、この非文字資料研究が展開されてきたことを示しています。今号の表紙には、1号からそれぞれの表紙を掲げております。そして、内容は公開研究会などの活動、共同研究の研究調査報告、招聘研究員レポート、派遣研究員レポート、研究員による研究エッセイと、現在推進されている活動が盛り込まれています。田上繁センター長のもと、これらの活動を継承し、発展させていくことを改めて心に刻む所存です。(M.O)

第17回 常民文化研究講座 渋沢敬三の民具研究

趣 旨

日本常民文化研究所は、1921年、渋沢敬三により「アチック・ミュージアム・ソサエティ」として創立された。以来、研究所の活動は、民具や絵画を用いた非文字資料研究および海村史料による海域海民史研究といった常民文化をおもな対象としてきた。とくに民具研究は口頭伝承を重視する柳田民俗学ではあまり注目されることのなかったモノ資料に注目したもので、その先駆性は高く評価され、今なお研究所は日本における民具研究の拠点として内外に知られている。そうした研究方針の策定と大きくかわり、また実際に研究を主導してきたのが渋沢敬三である。1982年に神奈川大学の付属研究所となって以降もその研究姿勢は受けつがれている。

そこで、本年度の常民文化研究講座では、没後50周年を記念し、渋沢敬三の担った民具研究についてシンポジウムを開催することとした。それは、たんに渋沢の功績を顕彰するにとどまらず、その後の民具研究のあり方とのかかわりについても検証をおこなうものとする。

なお、本年度は神奈川大学において日本民具学会大会を招致することもあり、本シンポジウムを広く周知するため、日本民具学会との共催によりおこなうこととした。さらに、本シンポジウムは、渋沢資料館や国

立民族学博物館による一連の渋沢敬三没後50周年記念事業にも位置づけられる。

○日 時 2013年11月9日(土) 13:00～17:00

○場 所 神奈川大学横浜キャンパス 8号館822教室

内 容

・基調講演 佐野賢治(神奈川大学)

・パネル報告

「民具研究の萌芽」 小島摩文(鹿児島純心大学)

「低湿地文化論の現在」 大門 哲(石川県立歴史博物館)

「農漁民の提唱」 秋山笑子(千葉県立中央博物館)

・総合討論 コーディネーター 刈田 均・高橋典子(日本民具学会)
※報告のテーマは変更することがあります。

共催：神奈川大学日本常民文化研究所・日本民具学会

お問い合わせは、日本常民文化研究所
TEL: 045-481-5661 (内線4353)

神奈川大学国際常民文化研究機構 第5回 国際シンポジウム 「渋沢敬三の資料学－日常史の構築－」

第Ⅰ部：国際シンポジウム「庶民・日常への眼差し－世界常民学への道－」

第Ⅱ部：公開研究会「ビジュアル資料と渋沢敬三－アチックフィルム・写真からの展望－」

日時：第Ⅰ部：2013年12月7日(土) 10:00～17:15

第Ⅱ部：2013年12月8日(日) 10:00～17:15

場所：第Ⅰ部：神奈川大学横浜キャンパス16号館セレストホール

第Ⅱ部：神奈川大学横浜キャンパス16号館視聴覚ホールB

第Ⅰ部 国際シンポジウム「庶民・日常への眼差し－世界常民学への道－」

基調講演 ヨーゼフ・クライナー(ボン大学 名誉教授)

パネル報告 曹幸穂(中国・農業博物館前館長)、ジョセフ・キブルツ(フランス・フランス国立科学研究センター)、宮本瑞夫(宮本記念財団)、福岡正太(国立民族学博物館)、崔順権(韓国・国立民族博物館)

コメント 崔吉城(広島大学 名誉教授)、佐藤健二(東京大学 教授)

第Ⅱ部 「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」グループ公開研究会「ビジュアル資料と渋沢敬三－アチックフィルム・写真からの展望－」(仮題)

研究報告 高城玲(神奈川大学)、原田健一(新潟大学)、井上潤(渋沢史料館)、飯田卓(国立民族学博物館)、小島摩文(鹿児島純心女子大学)、清水郁郎(芝浦工業大学)、小林光一郎(日本常民文化研究所)、羽毛田智幸(横浜市歴史博物館)

コメント 小川直之(國學院大学)

主催：神奈川大学国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所

*上記の内容は変更することがございますので、予めご了承ください。

*開催に関する詳細はホームページをご参照ください。

お問い合わせは、神奈川大学 国際常民文化研究機構 事務局
TEL: 045-481-5661 (内線6111～6112)

神奈川大学歴史調査報告第14集 中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ

●2012年3月31日発行 A4判138ページ

●発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

●内容：「中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ」に続き、2011年に実施した中国湖南省藍山県の過山系ヤオ族に伝承されているイニシエーションの還家恩儀礼に関する調査報告書である。儀礼の実施とそこで使用される文献の両面から、ヤオ族の儀礼知識の全容を明らかにする取り組みである。

神奈川大学歴史調査報告第16集 戦後開拓－長野県下伊那郡増野原－ －オーラルヒストリーからのアプローチ－

●2013年3月30日発行 A4版227ページ

●発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

●内容：長野県下伊那郡増野原を対象とした戦後開拓の調査報告である。神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科森武磨ゼミナールと地元飯田市の研究者との合同調査によって、戦後開拓を、聞き書きを中心とした、オーラルヒストリーによって描いたものである。

非文字資料研究 No.30

発行日 2013年7月25日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

